

研究ノート

1571 年～1590 年の聖地巡礼記に見る イスラーム観・ムスリム観・十字軍観 —— 後期十字軍再考 (9) ——

櫻井 康 人

はじめに

I. システムの変化と巡礼者たちの経験

1. 近くなったオスマン帝国への入り口
2. 遠くなったエルサレム
3. 護衛と心付け

II. ムスリム観・イスラーム観

1. イスラーム信仰
2. イスラーム信仰の实践者としてのムスリム観

III. 十字軍観・聖地回復の希望

1. 聖墳墓の騎士
2. 「十字軍」の記憶
3. 聖地回復の希望と「十字軍」の希望

おわりに

はじめに

オスマン帝国は、1571 年 8 月にヴェネツィア領となっていたキプロス島を占領することに成功したものの、同年 10 月 7 日には十字軍特権を伴う神聖同盟（ヴェネツィア、スペイン、教皇庁）によってレパント沖での戦いで大敗北を喫した。しかし、1573 年にヴェネツィアとの間に和平（これにより、キプロス島が同帝国に正式に譲渡された）が結ばれると、同帝国は西地中海世界での活力も取り戻し、1574 年にはスペインの支配下に置かれていたハフス朝を滅ぼしてモロッコを除くマグリブ地域を勢力下に収めることに成功した。

このように地中海世界だけに目を向けると、F・ブローデルが強調するほどに、オスマン帝国の勢いが衰えたようには見えない⁽¹⁾。ただし、オスマン帝国以東の状況に視線を注ぐと、確かに帝国は驕りを見せ始めていた。1568 年、セリム 2 世は 2 年にも及ぶアスト

⁽¹⁾ ブローデル・F（浜名優美訳）『地中海』8 巻・9 巻、藤原書店、1999 年。

ラハン遠征を行うも北方の新興国ロシアに敗北した。また、1578年から1590年まで続くこととなるオスマン＝サファールヴィー戦争では最終的に勝利を収めたものの、1579年には事実上の帝国の運営者であった大宰相ソコルル・メフメト・パシャがサファールヴィー朝の放った間者によって暗殺されると、オスマン帝国は政治的に混乱していくこととなった。さらに1580年代以降、多方面で展開される戦争にかかる費用の増大に加えて、新大陸から流入してきた銀が同帝国の経済的にも混乱させた。このような状況下において、1580年にはイギリスにカピチュレーションを付与するなどして、オスマン帝国はヨーロッパ世界との安定した関係を模索した。しかし、1593年、トランシルヴァニア公国の支配権を巡る、いわゆる「十五年戦争」が勃発すると、1568年に和睦を結んでいたハプスブルク家との関係は再び悪化することとなった⁽²⁾。

これまでに筆者は、いわゆる後期十字軍を再考するために聖地巡礼記に焦点を当ててきたが⁽³⁾、本稿で対象となる1571年から1590年のオスマン帝国とヨーロッパ世界との状況を概観すると、以上ようになる。このような時期に聖地巡礼を行い、その活動の記録を残した者たちは、どのような経験をしたのであろうか、そしてその経験は彼らのイスラーム観や十字軍観に何らかの影響をもたらすこととなったのであろうか。このことを考える前に、本稿の対象時期に作成された旅行記の全44作品を、これまでの拙稿における区分に従って分類してみると⁽⁴⁾、A群（メモワール）が0作品、B群（旅行記・地理書・歴史書）が15作品、C群（創作・伝記・年代記）が2作品、D群（聖地巡礼記）が24作品、E群（巡礼ガイド）が0作品、F群（その他）が3作品となる（表1）。この数値のみを見

⁽²⁾ このような状況については、永田雄三編『世界各国史9 西アジア史II イラン・トルコ』山川出版社、2002年、250～254頁、等を参照。

⁽³⁾ 拙稿「後期十字軍再考（1）—14世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観—」『ヨーロッパ文化史研究』7号、2006年、1～50頁（以下、「後期十字軍再考（1）」と略記）；拙稿「後期十字軍再考（2）—14世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム世界—」『ヨーロッパ文化史研究』8号、2007年、37～75頁；拙稿「15世紀前半の聖地巡礼記に見る十字軍・イスラーム・ムスリム観—後期十字軍再考（3）—」『ヨーロッパ文化史研究』10号、2009年、53～100頁（以下、「後期十字軍再考（3）」と略記）；拙稿「1450～1480年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（4）—」『ヨーロッパ文化史研究』12号、2011年、179～227頁；拙稿「1481～1500年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（5）—」『ヨーロッパ文化史研究』13号、2012年、199～246頁；拙稿「1501年～1530年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（6）—」『ヨーロッパ文化史研究』14号、2013年、99～133頁（以下、「後期十字軍再考（6）」と略記）；拙稿「1531年～1550年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（7）—」『ヨーロッパ文化史研究』15号、2014年、73～97頁（以下、「後期十字軍再考（7）」と略記）；拙稿「1551年～1570年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（8）—」『ヨーロッパ文化史研究』17号、2016年、53～83頁（以下、「後期十字軍再考（8）」と略記）。

⁽⁴⁾ 拙稿「後期十字軍再考（1）」10～28頁；拙稿「後期十字軍再考（3）」55～71頁。なお、本文および注の中で触れられる史料の表記方法についてもこれまでの拙稿に準じて、表1に付随する参考文献リストの整理番号に従って記すが、D群はその数字のみを記すこととする。

表 1 1571～1590 年の旅行記リスト
(レーリヒト：68, トブラー：22, シュル：13, ゴメス：9)

A メモワール (聖地回復論覚書)

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考

B 旅行記・地理書・歴史書

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	フィリップ・ピガフエッタ	1571	ヴィチエンツァ	学者	伊	752				カイロからシナイ山までの巡礼記。
2	フィリップ・デュ・フレヌ＝カナイエ	1573	パリ	後のフランス国王顧問官	仏	755				15 歳の時に行ったヴェネツィアからイスตันบูลへの旅行の記録。
3	ハンス・ウルリヒ・クラフト	1573-1578	ウルム	商人	高独	756				マルセイユからトリポリまでは、D-1 と同船。トリポリを拠点に商社員として活動するが、1574 年に本社が破綻したために負債を背負い、3 年間トリポリにて軟禁状態に置かれる。
4	ジャンジャコモ・マンニ	1573-1580	ティチーノ	地理学者	伊	757				世界の地理書。
5	ケルビーノ・ステッラ	1576	ヴェネツィア?	フランチェスコ会士	伊	761				ローマから聖地に至るまでの間にある町の間の距離を記した書。
6	ステファノー・ルシニャーノ	1577	キプロス	ドミニコ会士	伊	762				キプロス王国の歴史書。
7	ジョン・ニューベリー	1579	ロンドン	商人	英	767				ペルシアやオスマン帝国の旅行記。聖地も訪れたと記すが、具体的な記述はなし。
8	ヴァンサン・ル・ブラン	1579	マルセイユ	商人	仏	768				フランス国王の顧問官ユスターシーユ・ピコに捧げる。東南アジアからアフリカまでの旅行記。
9	ガスパーロ・バルビ	1579-1588	ヴェネツィア	宝石商	伊	769				インドへの旅行記。

10	ハインリヒ・ビュンティンク	1581	グロナウ・アン・デア・ライネ	福音派牧師・神学者	高独	774					プラウンシュヴァイク＝リユネブルク公ヴィルヘルム若公に捧げる。聖書から、そこに登場する様々な人物の旅について記す。僅かながらも、過去の「十字軍」(1246年まで)の歴史や、1517年以降の現状についての情報も含む。
11	ミヒャエル・ハベラー	1582-1589	ブレッテン	書記官	高独	781					アレクサンドリアで捕虜となり、イスタンブルまで連行されたことに関する記録。
12	クリステイアーン・フアン・アドリヘム	1584	デルフト	司祭・神学者	羅	791					聖書の記述を交えた歴史書。
13	ザムエル・キーヒェル	1585-1589	ウルム	商人	高独	795	41	313			
14	ジョヴァンニ・クリストフォロ・タイフエル	1587-1590	ゲンダースドルフ	伯	伊	806					イスタンブルなどの旅行記。
15	エドワード・ウェッブ	1590	ロンドン	砲手長	英	817					簡素な体験記。砲手長として対オスマン帝国戦に参戦するも、捕虜となる。その後イングランドに戻るも、最終的にはフランス国王アンリ4世に仕える。

C 創作・伝記・年代記

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	フランソワ・アルスレ	1580	リヨン	出版業者	仏					ゴドフロワ・ド・ブイヨンおよびボードワン1世に関する歴史書。
2	エマヌエーレ・フィリベルト	1581	トリノ	サヴォイア公	羅	776				聖書の記述中心、および書簡。

D 聖地巡礼記

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	レオンハルト・ラウヴォルフ	1573-1576	アウクスブルク	医師・植物学者	高独	758	27	468		マルセイユからトリポリまでは、B-3と同船。B-3が捕虜となった後も、仲間としてその安否を心配する。聖地巡礼は1575年に行う。

2	ハンス・ヤーコブ・プロイ ニク・フォン・ブーヒー ンバハ	1579	ブーヒーエンバハ	貴族	高独	766	29	98		ヴェルテンベルク公ヨハン・フリードリヒ に捧げた書であり、挿絵を多く含む。D-3 と同行。
3	ジャン・ル・カリエール・ド・ ピニオン	1579	カンブレレー	貴族・領主	仏			123		ヴェネツィアにて巡礼同行者を探していた 結果として、D-2 と同行。
4	ローレンツ・アルダーシー	1581	ロンドン	商人	英	773	34	7		
5	ジャン・パレーヌ	1581	リヨン・ラ・フォ レ	アンジュー公 フランソワ1 世・ド・ヴァ ロワの書記	仏	775	32			
6	ザロモン・シュヴァイッ ガー	1578- 1581	テュービンゲン	ルター派神学 者	高独	777	33	535		ムラト3世に向けて神聖ローマ皇帝ルド ルフ2世が派遣した外交使節団のチャプレン として東方で3年間を過ごした。その中の 1581年に聖地巡礼を行った。その書は多く の挿絵を含む。
7	フランチェスコ・ダ・シチ リア	1583	メッシーナ	フランチェス コ会士(元ベ ツレヘム管区 長)	伊	782				
8	ヨハンセン・フォン・ラウ フェン	1583	ルツェルン	市民	高独	784	37			D-9・D-10・D-11 と同行。
9	メルヒオール・ルツシ	1583	ウンターヴァルデン	領主・騎士	高独	785	36	356	55	D-8・D-10・D-11 と同行。
10	ルドルフ・プフォイファー	1583	ルツェルン	市民	高独	786	38			D-8・D-9・D-11 と同行。
11	ペーター・ギッスラー	1583	ウリ	フオークト・ 騎士	高独					D-8・D-9・D-10 と同行。
12	ミコワイ・クシシュトフ・ ラジヴィウ・シエトカ	1583- 1584	チミエルフ	貴族	羅・波	787	40	464	63	
13	ロドリゴ・デ・イエベス	1583	トレド	修道士	西	788				聖書の話や地理的情報を中心とする。
14	不詳ニュルンベルク	1583	ニュルンベルク		高独	789				
15	ジャック・ド・ヴァランベール	1584	ブザンソン	造船局長	仏				76	

F その他

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	アリアス・モンタス	1571	スペイン	人文主義者, 聖職者	羅	751				著者はフェリペ2世に仕えた。人名・地名に關する, ヘブライ語・カルデア語・ギリシア語・ラテン語の対訳辞書。
2	ミヒヤエル・アイトジンガー	1582	オーストリア	貴族	羅	779				聖所についての辞典。
3	不詳	1583	シドン	司教	羅	790				シドン司教による東方世界へのミッシェン活動の報告書。

注: (1) 表1・表2は, 以下の史料およびその編者による解説を基にして作成した。

- (2) 略号は次の通り。To = トブラー (Tobler T, *Bibliographia geographica Palaestinae. Eine kritische Übersicht gedruckter und ungedruckter Beschreibungen der Reisen ins Heilige Land*, Leipzig, 1867), Rö = レーリヒト (Röhrich, R., *Bibliotheca geographica Palaestinae, Chronologisches Verzeichniss der Auf die Geographie des Heiligen Landes bezüglichen Literatur von 333 bis 1878 und Versuch einer Cartographie*, Berlin, 1890), Sc = シュル (Schur, N., *Jerusalem in Pilgrims' Accounts: Thematic Bibliography of Western Christian Itineraries, 1300-1917*, Jerusalem, 1980), Go = ゴメス = ジェロー (Gomez-Géraud, M-C., *Le crépuscule du Grand Voyage: les récits des pèlerins à Jérusalem (1458-1612)*, Paris, 1999).
- (3) レーリヒト, シュル, ゴメス = ジェローについては, その整理番号に依拠している。トブラーは整理番号を付けていないので, 該当範囲内に
おいて筆者が1から整理番号を付けた。

史料

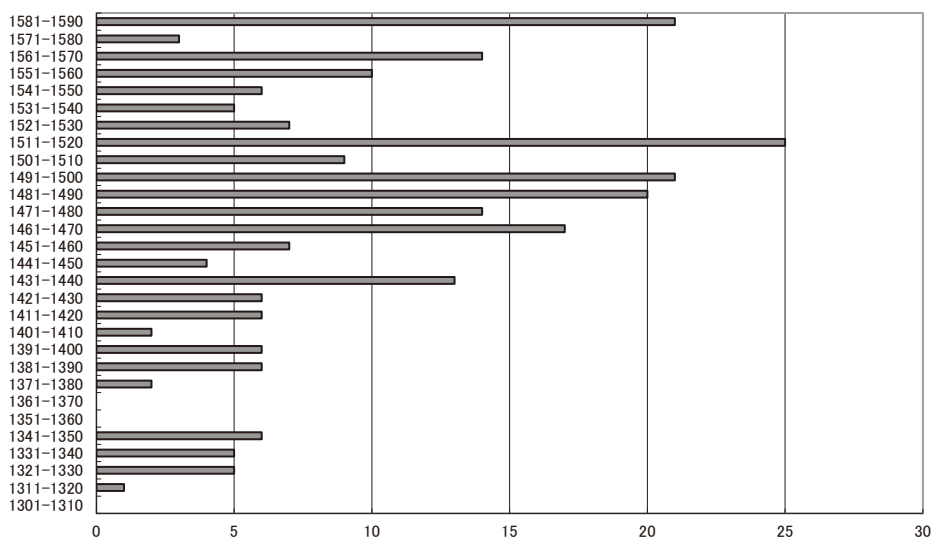
- B-1: Grasset, F. (a cura di), *Viaggi vicentini inediti compendati*, Venezia, 1837.
- B-2: Hause, M. (tra. et notes), *Philippe du Fresnoy, le voyage du Levant de Venise à Constantinople, l'émerveillement d'un jeune humaniste*, Paris, 1897, rep., Toulouse, 1986.
- B-3: Haszler, K. (Hrsg.), *Reisen und Gefangenschaft Hans Ulrich Kraffts aus der Originalhandschrift*, Stuttgart, 1861.
- B-4: Cora, G., *Cosmos, Comunicazioni sui progressi più recenti e notevoli della geografia e delle scienze affini di Guido Cora*, 2, Torino, 1874, p. 125.
- B-5: *Poste per diuere parti del mondo con tutte le fiere notabili, che si fanno per tutto il mondo. Con una breve narratione delle sette chiese di Roma, con il viaggio di S. Giacomo di Gal. Aggiuntovi di nuovo il viaggio di Gierusalemme*, Venetia, 1653.
- B-6: *Raccolta di cinque discorsi intitolati corone*, Padova, 1577.
- B-7: Purchas, S., *Haklyut Posthumus or Purchas His Pilgrimes: Contayning a History of thye World in Sea Voyages and Lande Travells by Englishmen and other*, rep. 8, Glasgow, 1905, pp. 449-481, rep. 9, Glasgow, 1905, pp. 493-503.
- B-8: *Les voyages fameux qu'il a faits depuis l'aage de douze aus jusqu'à soixante aus quatre parties du monde redigez fidellement sur ses mémoires et registres par P. Bergeron*, Paris, 1648.
- B-9: *Viaggio delle Indie orientali di Gasparo Balbi, Giotelliere venetiano, nel quale si contiene quanto egli in detto viaggio ha veduto dal 1579 fino al 1588*, Venetia, 1590.
- B-10: *Itinerarium Sacrae Scripturae das ist, ein Reisebuch, vber die gantze heilige Schrift, in zwey Bücher getheilet. Das erste Theil, Begreiff die Reisen der lieben Patriarchen, ... Das ander gehet auff das Neue Testament, vnd zeigt an, wie die Jungfraw Maria, Joseph, die Weisen aus, Leipzig, 1585.*
- B-11: *Aegyptiaca Servitus, das ist warhafftige Beschreibung einer Dreijährigen Dienbarkeit So zu Alexandrien in Egypten ihren Anfang und zu Constantinopel jr Endschaft genommen*, Heydelberg, 1610.

- B-12: Iersusalem, Sicut Christi Tempore Floruit, Et suburbanorum, insigniorumq historiarum eius brevis descriptio Simvl Et Locorum, Qvae Iesu Christi Et Sanctorum passione gestisq decorata sunt, succinctus commentarius, Coloniae Agrippinae, 1584.
- B-13: Protting, H. (Hrsg.), Die Reisen des Samuel Kiechel, 1585–1589, München, 1987.
- B-14: Il viaggio di molto illustre Liignon. Giovanni Christophoro Tayfel, barone in Gunderstorff Austriaco, fatto di Constantinopoli verso Levante, Vienna, 1598.
- B-15: Arber, E. (ed.), Edward Webbe, Chief Master Gunner, His Trauuailes. 1590, London, 1868.
- C-1: La genealogie et nobles faitz d'armes du trespreux et renommé prince Godefroy de Buillon; Aussi le voyage d'ourtre mer en la terre sainte, fait par le roy Saint Loys, et plusieurs autres croniques, Lyon, 1580.
- C-2: Sinon evangelica; accesserunt hymni aliquot, insignis bulla pontifica, elegans epistola Francisci Adorni de peregrinatione memorabili, Augustae Taurinorum, Bevilacqua, 1581.
- D-1: Feyerabend, S., Reyßbuch deß heyligen Lands, Das ist Ein grundtliche beschreibung aller vnd jeder Meer vnd Bilgerfahrten zum heyligen Lande, so bißhero, in zeit dasselbig von den Vngläubigen erohert vnd inn gehabt, beyde mit bewehrter Hand vnd Kriegßmacht, zu wider Eroberung deren Landt, vorgenommen, Franckfort am Mayn, 1584, fol. 276a–349a.
- D-2: Orientalische Reyß deß edlen unnd vesten, Hanß Jacob Breünning, von und zu Buochenbach, so er selbander in der Türckey, under des türckischen Sultans Jurisdiction und Gebiet, so wol in Europa als Asia unnd Africa ohn einig Cuchium oder FreyGeleit, benantlich in Griechen-Land, Egypten, Palestina, das Heylige Gelobte Land und Syrien, nicht ohlne sondere grosse Gefähr, vor dieser Zeit verrichtet alles in 5 unterschiedliche Meerfahrten, Straßburg, 1612.
- D-3: Blochet, E. (éd.), Voyage en Orient, Paris, 1920.
- D-4: Hakluyt, R., The Principal Navigations Voyages Traffiques and Discoveries of the English Nation, rep. 5, New York, 1969, pp. 202–214.
- D-5: (1) Peregrinations du S. Jean Palerne... : où est traicté de plusieurs singularités et antiquités remarquées és provinces d'Egypte, Arabie... Terre sainte, Surie, Natolie, Grece, Lyon, 1606.
(2) Sauneron, S. (éd.), Le voyage en Egypte, de Jean Palerne, Forésien, Caire, 1970. (エジプトの記述のみ)
- D-6: Neck, R. (Ein), Ein neue Reyßbeschreibung auss Teutschland nach Constantinopel und Jerusale, Graz, 1964.
- D-7: Giovanni, D. (a cura di), "Viaggio in Terrasanta o' Notizie della Palestina scritte nel 1585", Nuovo effemeride Siciliae, 3–12, 1881, pp. 59–86.
- D-8: Schmid, J. (Hrsg.), Luzerner und Innerschweizer Pilgerreisen zum Heiligen Grab in Jerusalem vom 15. bis 17. Jahrhundert, Luzern, 1957, S. 55–148.
- D-9: Reißbuch gen Hierusalem : Welcher massen der Gestrang, Edel, Nothvest, Fürsichtig Vnd Weiß Herr Melchior Lussy Ritter, Landamman zu Underwalden ... in das heilige Land Palestina gezogen ist ; Darinnen dann die fürnembeste Stätt vnd Orther von Christo vnserm liebsten Herren vnd Heyland weyländ persönlich heimgesucht ... werden ; Sampt weiter Verzeichnuß viler anderer denckwürdiger örther vmd zufüllender Gefahren, welche gedachtem Herrn, sampt seiner Gesellschaft auff diser Pilgerfahrt zu Wasser vnd Land begegnet seyn, Freyburg, 1590.
- D-10: Schmid, J. (Hrsg.), Luzerner und Innerschweizer Pilgerreisen zum Heiligen Grab in Jerusalem vom 15. bis 17. Jahrhundert, Luzern, 1957, S. 153–162.
- D-11: Schmid, J. (Hrsg.), Luzerner und Innerschweizer Pilgerreisen zum Heiligen Grab in Jerusalem vom 15. bis 17. Jahrhundert, Luzern, 1957, S. 149–152.
- D-12: (1) Hierosolymitana peregrinatio illostrissimi domini Nicolai Christophori Radzivili, Ex idiomate Polonico in Latinam linguam translata et nunc primum edita, Brvnbergae, 1601. (羅語訳版)
(2) Peregrinacia Abo Piłgrzymoimie do Ziemi Świętej, Jásnie, Krakowie, 1607. (波語版)
- D-13: Tractado y descripción breve y compendiosa de la Tierra Sancta de Palestina, especialmente quanto a los lugares de que ay mención en las Divinas letras y que más pertenecen a la historia de la vida y muerte de nuestro Redemptor Jesú Christo, Madrid, 1583.
- D-14: Neue Schiffart : darinnen eigentlich und auffß kurzest beschrieben wird die Reise einer Schiffahrt aus Constantinopel in Syriam, Palaestinan, Aegypten und auff den Berg Sinai, Nürnberg, 1583.
- D-15: Bibliothèque Municipale de Besançon cote 1463, fol. 46r–64l.
- D-16: Massaia, G. (a cura di), Il viaggio di Terra santa e di Gerusalemme, Pesaro, 1886.

- D-17 : (1) *Il devotissimo viaggio di Gerusalemme, Fatto, et descritto in sei libri dal Sigr G. Zuallardo*, Roma, 1587.
 (2) *Le tresdevot voyage de Iersusalem, avecq les Figures des lieux saints, et plusieurs autres, tirées au naturel. Faict et descript par Oean Zvallart, Cheualier du saint Sepulchre de nostre Seigneur, Mayeur de la Ville d'Ath en Haynnaut*, Anvers, 1608.
- D-18 : *Del viaggio di terra santa da Venetia, à Tripoli, di Soria per terra à Gersusalem, per la città di Damasco, co'l ritorno in Christianità, per via di Costatinopoli*, Novara, 1596.
- D-19 : *Lvzero dela Tierra Sancta, y gran dezas de Egipto, y monte Sinay, agora nuevamēte vistas y escriptas*, Valladolid, 1587.
- D-20 : *Beschreibung einer Reiß auß Teutschland viß in das gelobte Landt Palaestina, vnn̄d gen Jerusalem, auch auff den Berg Synai, von dannen widerumb zu ruck auff Venedig vnd Teutschland*, München, 1609.
- D-21 : *Viaggio da Venetia al Santo Sepolchro, et al monte Sinai, piv compiosamente descritto de gli altri : con disegni de pasesi, città, porti, et chiese, et li santi luochi*, Venetia, 1587.
- D-22 : *La gvide des chemins pōvr le voyage de Hiérusalem et autres villes et lieux de la Terre Sainte avec la description de plusieurs villes et forteresses et de leurs antiquies et modernes singularitez*, Chaalons, 1601.
- D-23 : *El viage de Hiernsalem qve hizo Francisco Guerrero, Raciouero, y Maestro de Capilla de la santa iglesia de Seuilla*, Nauarro, 1593.
- D-24 : (1) *Les voyages du seigneur de Villamont, divizez en trois livre*, Paris, 1595.
 (2) *Les voyages du seigneur de Villamont*, Paris, 1600.
- F-1 : *Hebraea, chaldaea, graeca et latina nomina virorum, mulierum, populorum, idolorum, vrbium, fluiuiorum, montium, caeterorumque locorum quae in Bibliis viriusque Testamenti leguntur in veteri interprete*, Antuerpiae, 1571.
- F-2 : *Terra promissionis topographice descripta*, Coloniae Agrippinae, 1582.
- F-3 : Mansi, J. (ed.), *Stephani Baluzii Tutelensis miscellanea novo ordine digesta et non paucis ineditis monumentis opportunisque animadversionibus aucta*, 4, *Vnventium Iunctin-*
ium, 1764, pp. 150-185.

表2 移動経路

D-1	ヴェネツィア→チェリー→ゴ→カンディニア→トリボリ→ダマスクス→アレップ→ラッカ→バグダード→アレップ→トリボリ→(船)→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→(船)→トリボリ→キプロス→カンディニア→チェリー→ゴ→ザンテ→コルフ→ザラ→ヴェネツィア
D-2	ヴェネツィア→ヴァローナ→アトロント→コルフ→ザンテ→チェリー→ゴ→ネグロポリンテ→イスタンブル→キオス→ロドス→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→ダミエッタ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ヤッファ→(船)→トリボリ→アレップ→ダマスクス→トリボリ→サリ→ネ→カンディニア→パルモ→マルタ→コルシカ→マルセイユ
D-3	ヴェネツィア→ヴァローナ→コルフ→ザンテ→チェリー→ゴ→カンディニア→ネグロポリンテ→イスタンブル→ロドス→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→カイロ→ダミエッタ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→トリボリ→ダマスクス→トリボリ→マリマノル→カンディニア→ザンテ→コルフ→ヴェネツィア
D-4	ヴェネツィア→ザンテ→キプロス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→トリボリ→サリ→ネ→カンディニア→ザンテ→コルフ→ヴェネツィア
D-5	ヴェネツィア→コルフ→ザンテ→カンディニア→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→カイロ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ヤッファ→(船)→トリボリ→ダマスクス→トリボリ→ファマグスタ→ロドス→イスタンブル→アドリア→マリマノル→ソフィア→ラダ→ザ→ヴェネツィア
D-6	ウィーン→ブダペスト→グラー→ロド→フィリッポポリス→アドリア→ノーブル→イスタンブル→ロドス→アレクサンドリア→カイロ→トリート→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスクス→トリボリ→カンディニア→コルフ→ラダ→ザ→ヴェネツィア
D-7	トリボリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→アレップ→ダマスクス→ガザ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア
D-8	ヴェネツィア→ヴァローナ→ザンテ→カンディニア→マリマノル→サリ→ネ→トリボリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→(船)→トリボリ→サリ→ネ→マリマノル→カンディニア→ザンテ→ナポリ→ローマ→ヴェネツィア
D-9	ヴェネツィア→ザンテ→カンディニア→キプロス→トリボリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→トリボリ→サリ→ネ→ザンテ→ナポリ→ヴェネツィア
D-10	ヴェネツィア→キプロス→トリボリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→トリボリ→サリ→ネ→ザンテ→ヴェネツィア→ローマ
D-11	ヴェネツィア→ザンテ→カンディニア→マリマノル→エルサレム→キプロス→ザンテ→ヴェネツィア→ローマ
D-12	ヴェネツィア→ヴァローナ→コルフ→ザンテ→チェリー→ゴ→カンディニア→マリマノル→サリ→ネ→トリボリ→ダマスクス→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→トリボリ→アレップ→トリボリ→マリマノル→ダミエッタ→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→アレクサンドリア→ロドス→カンディニア→チェリー→ゴ→コルフ→レッチェ→ローマ→アンコーナ→ヴェネツィア
D-13	エルサレム
D-14	イスタンブル→キオス→ロドス→キプロス→トリボリ→エルサレム→ラムラ→ガザ→カイロ→シナイ山→アレクサンドリア→ロドス→イスタンブル→アドリア→ノーブル→ソフィア→パオダラ→ハンガリー
D-15	マルセイユ→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→アレクサンドリア→トリボリ→エルサレム→ダマスクス→アレップ→トリボリ→ローマ
D-16	ヴェネツィア→ラダ→ガ→カタ→コルフ→ザンテ→チェリー→ゴ→カンディニア→マリマノル→サリ→ネ→トリボリ→(船)→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスクス→トリボリ→メッシーナ→ナポリ→ローマ→アンコーナ
D-17	ヴェネツィア→ヴァローナ→コルフ→ザンテ→チェリー→ゴ→カンディニア→マリマノル→サリ→ネ→トリボリ→(船)→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ヤッファ→(船)→トリボリ→アレップ→トリボリ→ザンテ→ヴェネツィア
D-18	ヴェネツィア→ヴァローナ→ザンテ→チェリー→ゴ→カネア→マリマノル→サリ→ネ→トリボリ→ダマスクス→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→(船)→トリボリ→キオス→イスタンブル→キオス→カネア→チェリー→ゴ→ザンテ→パルモ→サレルノ→ローマ
D-19	シチリア→アレクサンドリア→カイロ→ダミエッタ→ガザ→エルサレム→ダマスクス→アレップ→エルサレム→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリ
D-20	ヴェネツィア→ザンテ→キプロス→トリボリ→(船)→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→(船)→トリボリ→ダミエッタ→カイロ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリ→マルタ→シチリア→ヴェネツィア
D-21	ヴェネツィア→カンディニア→ロドス→パフォス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスクス→バイル→トリート→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→ガザ→ダミエッタ→ファマグスタ→ヴェネツィア
D-22	マルセイユ→マルタ→カンディニア→ロドス→サリ→ネ→トリボリ→(船)→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→トリボリ→ファマグスタ→ザンテ→ヴェネツィア→マルセイユ
D-23	ヴェネツィア→ザンテ→カンディニア→マリマノル→トリボリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→トリボリ→ファマグスタ→ザンテ→ヴェネツィア→マルセイユ
D-24	ローマ→ナポリ→アンコーナ→ヴェネツィア→コルフ→ザンテ→チェリー→ゴ→カンディニア→ロドス→ファマグスタ→サリ→ネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→トリボリ→ダマスクス→トリボリ→ファマグスタ→ダミエッタ→カイロ→アレクサンドリア→ザンテ→コルフ→ヴェネツィア



グラフ 1301 年～1590 年の聖地巡礼記数

てみると、A 群および E 群の作品は再びその姿を消してしまうものの、1550・60 年代までのそれとは大きく変わらないことから、「聖地巡礼の黄金期」は決して終焉を迎えたわけではないことが再確認される⁽⁵⁾。ただし、本稿で主たる考察対象となる D 群について言うと、東地中海の状況の回復以降も含めて、1570 年代はその数を大きく減らしている。その反面、1580 年代に入ると巡礼記作者の数は大きな増加傾向を見る（グラフ）。巡礼者を受け入れる側に立つ、聖地管区のフランチェスコ会が作成した巡礼者受け入れ名簿を見ても、1573 年には 1 人、1574 年には 6 人、1576 年には 1 人のみしか数えていない一方で、1582 年は 4 人、1583 年は 12 人、1584 年は 15 人、1585 年は 16 人、1586 年は 5 人、1587 年は 4 人、1588 年および 1590 年は各 1 人ずつとなっており⁽⁶⁾、とりわけ 1583 年から 1585 年の間に巡礼者の数が増加したことが分かる。

地域別についても少し考えてみよう（地図）。1550・60 年代に見られたのと同様に、当該時期においてもフランス地域出身の巡礼記作者数が相対的に見て減少傾向にあるのは、フランス王国内において相次いで勃発した宗教戦争に起因したと考えられる。同様のことは、スペイン王国などを巻き込んだ宗教戦争に発展した低地地方についても言える。その一方で、1583 年に集中しているルツェルン近郊の巡礼者数の増加は、ミラノ大司教カルロ・ボローメオを中心とした対抗宗教改革運動の結実として見なすことができよう⁽⁷⁾。

⁽⁵⁾ 拙稿「後期十字軍再考（8）」55 頁。

⁽⁶⁾ Lauda, P. (Zimolong, B. (Hrsg.)), *Navis peregrinorum*, Köln, 1938, S. 4-7.

⁽⁷⁾ このような状況については、森田安一編『世界各国史 14 スイス・ベネルクス史』山川出版社、



地図 巡礼者の出身地・出発地

ただし、ルツェルン近郊の巡礼団を除いて、特定の地域への偏りが見られないことこそが、この時期の特徴と言えるのかもしれない。

さて、この時期も多くの巡礼希望者たちがまず向かったのはヴェネツィアであった（表

1998 年，77～78 頁，等を参照。

2)。多くの巡礼者たちが認識していたように、当時のフランス王国とオスマン帝国は友好関係にあり⁽⁸⁾、例えば 8 は「異教徒および不敬者」Heÿden vnd vnglößighen の世界に向かうに当たって、より安全なマルセイユから船に乗るか、より危険なヴェネツィアから船に乗るかを思案した。しかし、最終的に 8 が選択したのは、フランス人の名前を騙りつつヴェネツィアにて乗船する、ということであった⁽⁹⁾。18 が記しているように、ヴェネツィアのメリットは聖地へのアクセスがより容易なことであり⁽¹⁰⁾、そのことがより多くの巡礼志願者をヴェネツィアに引きつけたのであろう。当該時期においてフランス籍船を選択したのは、シチリアからフランスのガレオン商船に乗船した 19 と、「危険と苦難」les dangers & les peines の旅を志したフランス人の 22 のみである⁽¹¹⁾。また、巡礼志願者たちがヴェネツィアを選択したもう一つの理由には、ローマ巡礼を行う上での利便性があった。ヴェネツィアで出会った後に行動を共にしていた 2 と 3 であるが、帰路においてはドイツ人の 2 は、シモン・リソールをパトロンとするトリポリ発マルセイユ行の商船ル・プティ・サンテスプリ号に乗船し、ローマ巡礼を目指したフランス人の 3 は、キプロスにてセバスティアーノ・ニッコロをパトロンとするボナルダ号に 5 ドゥカートを支払って乗り換えたのであった⁽¹²⁾。

確かに、ヴェネツィアは 1545 年の元老院決議により巡礼者がヴェネツィア籍の船に乗ることを原則的に禁止し、長らく聖地巡礼を支えてきたヴェネツィアのガレー巡礼船制度を廃止した⁽¹³⁾。しかし、副業として巡礼者たちを運搬するガレー商船が、ヴェネツィアで待ち構えていた。1575 年に聖地巡礼を行った 1 は、アントニオ・ラインハルトをパトロンとするサンタ・クローチェ号に乗船した⁽¹⁴⁾。それから 4 年後に出立した 2 および 3 も、同じくサンタ・クローチェ号に乗って東方に向かったことから、この船は長期にわたって巡礼者を運搬していたようである。当然のことながら、巡礼者を待ち受けていたのは 1 隻の船だけではなく、2 によると他にキオーツァ号とクロエリア号にも巡礼者が搭乗していた。なお、2 および 3 の支払った乗船代は、ヴァローナ（現ヴロラ）までが 3 ツェキーノ（＝

⁽⁸⁾ 2, S. 44, 126; 8, S. 82; 9, fol. 9 f.; 24- (1), fol. 251r.

⁽⁹⁾ 8, S. 57-61.

⁽¹⁰⁾ 18, fol. E.

⁽¹¹⁾ 19, fol. 31-41; 22, fol. Ciir.

⁽¹²⁾ 2, S. 283, 295; 3, p. 298. なお 24 は、帰路においてはザンテ出身のギリシア人をパトロンとするアレクサンドリア発ザンテ行の商船に乗船した。加えて彼が記すには、ギリシア人はトルコ人や異教徒以上にラテン人を憎んでいるが、パトロンの人柄が非常に良かったので乗船を決意したのであった。24- (1), fol. 294l-295r.

⁽¹³⁾ ヴェネツィアのガレー巡礼船制度とその変遷については、拙稿「『無料で運ぶわけではないし、神の愛のために運ぶわけでもない』—中世におけるヴェネツィア・ガレー巡礼船のパトロンたち—」『史料』97 巻 1 号、2014 年（以下、「パトロン」と略記）、50 頁。

⁽¹⁴⁾ 1, S. 278a.

3 ドゥカート)、イスタンブルまでが6 ツェキーノであったが⁽¹⁵⁾、この値段はガレー巡礼船と比べて破格であったと言える⁽¹⁶⁾。ヴェネツィアからキプロスまでノキエロ・ピロートを経由するガレー商船に乗船した20の場合も、支払った料金はわずか4 ドゥカートであった⁽¹⁷⁾。また、1580年代には、ジャコモ・アゴスティーノを経由するガレー商船のラ・トルニエツラ・アゴスティーノ号が、巡礼者たちの運搬で活躍していた⁽¹⁸⁾。

ただし、すべての巡礼者がこのような恩恵に与ったわけではなかった。上述のヴェネツィアの元老員決議には、巡礼者が40人以上集まればガレー巡礼船を用意するという附則が加えられている⁽¹⁹⁾。1583年にルツェルン近郊からの巡礼団を始めとして、ドイツ・フランス・イタリア・ハンガリーなどから45人の巡礼希望者が集まった時には、実際にガレー巡礼船が用意されたようであるが、この時に各自に要求された金額は300 クローネ（＝430 ドゥカート）という法外な値であった⁽²⁰⁾。ここにおいて、ヴェネツィアのガレー巡礼船システムの伝統は失われてしまったようである⁽²¹⁾。そしてこのことは、1560年代までは維持されていた聖地巡礼のシステムそのものも変化したことを予感させるが⁽²²⁾、以下に見るように、実際にそうであった。では、このような状況の変化は、巡礼者たちのムスリム観・イスラーム観や、十字軍観に何らかの影響を与えることになったのであろうか。

⁽¹⁵⁾ 2, S. 1-3, 9; 3, pp. 30-33.

⁽¹⁶⁾ ガレー巡礼船の料金は、40～60 ドゥカートが相場であった。拙稿「パトロン」56～57頁。

⁽¹⁷⁾ 20, fol. 31-51.

⁽¹⁸⁾ 6は帰路のカンディアからモドンまで乗船し、9は帰路のキプロスからザンテまで乗船し、17は往路のヴェネツィアからトリポリまで乗船した。17は同船者についても触れており、その数はフランスのバロンであるフィリップ・ド・メロードを始めとする10人であった。6, fol. 331; 9, fol. 69; 17, p. 65. なお、船名などの詳細については記されていないが、24は、ブリニャック領主フランソワ・ド・ルイエールを始めとする6人と共にガレー商船に乗船した。24-(1), fol. 102L.

⁽¹⁹⁾ 拙稿「パトロン」50頁。

⁽²⁰⁾ 8, S. 76, 79 f.; 9, fol. 3, 5 f.; 10, S. 155; 11, S. 149 f. 10の記述から、12も同じ船に乗っていたようであるが、12は船に関する情報を与えてくれない。8によると、最終的に同じ船に乗ったのは34人であり、一見すると11人はその時点で断念したようであるが、11が聖墳墓教会に入場する段階で巡礼者の総数は62人であったとしていることから、この時には2隻の巡礼船が準備されたようである。というのも、彼が同船者として挙げているのは、スイス地域出身者11人、イタリア人12人、フランス人9人、ポーランド人2人のみであり、そこにドイツ人は含まれていないからである。なお同じ8によると、同船者の内1人のイタリア人は、巡礼中にイスラームに改宗した。また、9によるとルツェルンの巡礼団にはカルロ・ボローメオも加わっていた。また、11によると、巡礼団の乗った船は聖地への直行便ではなく、カンディアおよびリマソルでの乗り換えが必要であった（カンディアからリマソルまでの船の名前はモレシーナ号との情報も与えられている）。

⁽²¹⁾ 拙稿「パトロン」56～59頁。

⁽²²⁾ 拙稿「後期十字軍再考（8）」66～67頁。

I. システムの変化と巡礼者たちの経験

1. 近くなったオスマン帝国への入り口

繰り返しになるが、1571 年はレバントの海戦でヨーロッパ世界が勝利した一方で、オスマン帝国がキプロス島を獲得した年であった。当該時期の巡礼記作者たちの心には、いずれのほうが大きな印象を与えたのであろうか。レバント沖での勝利について触れているのは 5 名であり⁽²³⁾、一方でキプロス島の占領について触れているのは 9 名となる⁽²⁴⁾。多くの巡礼者たちは、レバントの海戦におけるキリスト教世界の勝利を実感することはなかったようである。実際に、同海戦によってオスマン帝国は東地中海での活動を収縮させることはなく、むしろキプロス島の占領によってその活動領域を拡大していた。というのも、当該時期においては、ヴェネツィアを離れた巡礼者たちがまず立ち寄るのがヴァローナに変化しているからである(表 2)。まずそこで、巡礼者たちは在地のサンジャク・ベイとカーディーのチェックを受けることとなったのであり、中でも 3 はそこで奴隷として売られるのではないかと恐れている⁽²⁵⁾。周辺海域ではトルコ人海賊の活動が活発であり、1 や 17 によるとその活動領域はザラにまで及んでいた。24 は、早くもプーラにてザンテに向かうイングランド籍船を襲撃するトルコ人のガレー船の姿を目撃し、22 に至ってはナポリすらその脅威に晒されているとしている⁽²⁶⁾。コルフ、ザンテ、チェリーゴやカンディアのように、オスマン帝国の攻撃を凌いでいる地点もあった⁽²⁷⁾。しかし、周辺海域はオスマン帝国の支配下にあり、同帝国に税を支払っての上でその命運を保っている状態であり、各所にトルコ人役人も配備されていた⁽²⁸⁾。そして、多くの地点がオスマン帝国の直接支配下にあった⁽²⁹⁾。

このような海域を航行する場合、カーディーの発行する「通行許可書」pass-port が必

⁽²³⁾ 2, S. 29 f.; 3, p. 39; 17-(1), pp. 80-83; 18, fol. 324; 24-(1), fol. 2r, 112l.

⁽²⁴⁾ 2, S. 1, 29, 284; 3, p. 299; 5-(1), p. 332, 467-469; 8, S. 84, 129 f.; 9, fol. 65 f.; 17-(1), p. 91, 93; 22, fol. 401, 461; 23, fol. 10r f.; 24-(1), fol. 112l, 115l.

⁽²⁵⁾ 2, S. 13, 19 f.; 3, p. 36, 38; 8, S. 82; 12-(1), p. 18; 17-(1), p. 76; 18, fol. 5.

⁽²⁶⁾ 1, S. 348a-349a; 2, S. 19 f., 23; 3, p. 300; 4, p. 206; 17-(1), p. 70; 18, fol. 197-201, 204; 22, fol. 86l-87l, 93l; 24-(1), fol. 106r, 181l f., 294l-295r.

⁽²⁷⁾ 2, S. 32; 3, p. 45 f., 48 f., 55; 5-(1), p. 13 f., 17 f.; 16, p. 36 f.; 17-(1), p. 79, 88, 90, 338 f.; 23, fol. 9r; 24-(1), fol. 112l f.

⁽²⁸⁾ 3, p. 45 f.; 5-(1), pp. 18-21; 8, S. 83; 9, fol. 6; 12-(1), p. 232, 244, 256, 263; 17-(1), p. 84. なお、ラゲーズも同じような状況であったが、ラゲーズに寄港することがほとんどなくなったためであろうか、当該時期の巡礼記作者たちの中でそれについて触れる者はほとんどいない。5-(1), p. 517; 15, p. 33; 24-(1), fol. 109l f.

⁽²⁹⁾ 2, S. 34, 38 f., 104, 290; 3, pp. 56-60, 62, 64; 5-(1), pp. 342-344, 467-469, 491, 494, 502; 6, fol. 238-250, 330; 12-(1), p. 22, 257 f.; 14, fol. Aiir, Biir; 17-(1), p. 77, 85; 22, fol. 39r, 40l; 24-(1), fol. 115l, 118l.

要であった⁽³⁰⁾。4 の場合、スパイ容疑のかけられた同船者を捜査するために、500 人規模のオスマン帝国のガレー船団がやって来るという恐怖を体験したが、最終的には船長が通行許可書を提示することで事なきをえることができた⁽³¹⁾。しかし、12 の場合、恐らくは乗船した船が通行許可書を携帯していなかったのであろう、同船はミロ島近くで拿捕され、1 人のポーランド人ピョートル・プロニエヴスキーは殺害され、同じく 1 人のポーランド人マルチン・ルイエニエッチは奴隷としてイスタンブルに連行されてしまった⁽³²⁾。このように、巡礼者たちはヴェネツィアを出港してすぐに危険と隣り合わせていた。

しかし、むしろ指摘しておきたいのは、海上に関する記述の中で恐怖心を吐露する者は上記の 3 人を除いてほばいない、ということである⁽³³⁾。2 のように、巡礼者たちはアルバニアやギリシアにおいては信仰の自由が与えられていることを目の当たりにして安堵したのかもしれない⁽³⁴⁾。また、オスマン帝国への第一歩がヴァローナと近くなったことが、逆に巡礼者たちに早い段階で安心感を与えたのかもしれない。加えて、以前はヤッファ到着時にガーディアンから与えられていた注意事項が、当該時期にはすでにヴェネツィアで与えられるようになっていたようであり⁽³⁵⁾、巡礼者たちは事前に心構えを持つことができたことを、その理由として加えることができよう。9 によると、ヴェネツィアにてイエズス会発行の巡礼許可書が交付されており、その際に併せて注意事項が提示されたようである⁽³⁶⁾。その中には、海上で海賊に襲われた場合に渡すための金銭を用意すべきである旨の項目があることから、実際には金銭によって危険を回避した巡礼者たちが、少なくなかったと考えられる。加えて、上記のようにフランス人になりすまそうとした 8 の他に、17 はギリシア商人風の服を、18 はトルコ風のターバンを、20 や 24 はイエニチェリのようなトルコ風の服を携帯するといった、危険回避のための工夫を行っていた⁽³⁷⁾。

さて、巡礼者たちにとっての次なるチェックポイントは、オスマン帝国によって征服されて間もないキプロスであり、ヴァローナと同様に、ここでも巡礼者のチェック・管理の

⁽³⁰⁾ 5-(1), pp. 18-21; 6, fol. 233-237; 24-(1), fol. 132l. なお、6 の作品には通行許可書の写しが所収されている。

⁽³¹⁾ 4, p. 213.

⁽³²⁾ 12-(1), p. 245 f.

⁽³³⁾ 不安感を読み取ることができるのは、他に 9 と 24 の記述のみである。ただし、彼らがそれを記すのはまだヴェネツィアに滞在している段階においてである。9, fol. 3; 24-(1), fol. 294l-295r. なお、スペイン人の 19 は、むしろイングランド船に恐怖している。19, fol. 4r f.

⁽³⁴⁾ 2, S. 15.

⁽³⁵⁾ 3, pp. 309-321; 8, S. 66 f.; 18, fol. B-M; 20, fol. 8r-14l; 21, fol. A3r; 24-(1), fol. 294l-295r.

⁽³⁶⁾ 9, fol. 98-100. ただし、どのような経緯でイエズス会が関与したのかについては、現段階では不明である。

⁽³⁷⁾ 17-(1), pp. 32-38; 18, fol. 65; 20, fol. 18r, 50r f.; 24-(1), fol. 101l. 17 は、極力貧しい格好をすること、およびイスラームで神聖視されている緑色の服は避けるべきであるなどの情報を加える。

役割を担っていたのがカーディーである⁽³⁸⁾。以下にも見るように、当該時期に見られる大きな変化の一つが、巡礼システムにおけるカーディーの主導的役割である。もう少し細かく見てみると、まずは役人（イエニチェリ）が名前のチェックおよび各自 10 メディン⁽³⁹⁾の税の徴収を行った上で、役人たちと共に通行許可書の交付のためにカーディーの下に赴く、といった手順である。そして、その後の近隣へのエクスカーションもカーディーが統率して同行した。このような状況について、16 は「最悪」peggio とし、18 は「野蛮人の前での」avanti il suo barbarico チェックと記し、また 17 はキリスト教徒に対するミサの制限を嘆き、22 も「十字架が打ち倒されている」Croix est tombee ことを悲嘆する。しかし、その他の巡礼者たちは、キプロスにおける税の支払いとチェックを受けることを、単なる聖地巡礼の通過儀礼として受け入れていたようである⁽⁴⁰⁾。

2. 遠くなったエルサレム

キプロスにて手続きを済ませた巡礼者たちが次に向かったのは、従来のようにヤッファではなく、トリポリであった（表 2）。また、必然的に巡礼者たちはキプロスで船を乗り換えたが、キプロスから先の旅においては、「船長」を表す用語もパトロンから、アラビア語のライースへと変わっていく。トリポリに向かうライースの船には、巡礼者を監視するためにキプロスのカーディーも同船した⁽⁴¹⁾。そして、トリポリにおいて巡礼者たちは、トリポリのカーディーおよびバイレル・ベイ（不在時はサンジャク・ベイ）に引き渡された。

フランスを始めとする多くの国々の商館を備えた商業都市のトリポリに到着した巡礼者たちは、まずは役人およびカーディーに多額の税を支払った後に、イエニチェリの護衛が付けられた上で、バイレル・ベイが管理する巡礼宿へと導かれた⁽⁴²⁾。カーディーおよびイエニチェリはトリポリ近郊の観光案内も行ったが、12 に言わせると、それは「我々の金

⁽³⁸⁾ 5-(1), p. 333 f.; 8, S. 83; 12-(1), pp. 23-25; 16, p. 40; 17-(1), pp. 91-95; 18, fol. 13; 22, fol. 401-471; 24-(1), fol. 1181-1361. ただし、表 2 から解るように、キプロスが経由地として機能したのは 1580 年代に入ってからのものである。

⁽³⁹⁾ 18 は 5 メディン = 2 ツェキーノ = 2 ドゥカートと、20 は 85 メディン = 1 ツェキーノ = 1 ドゥカート = 0.7 クローネと、24 は 90 メディン = 1 ツェキーノと換算している。18, fol. 91-93; 20, fol. 611 f.; 24-(1), fol. 2611. 恐らくこの大きな違いの原因は、18 の誤解によるものであろう。

⁽⁴⁰⁾ なお、24 はリマソルに大量のイエニチェリが配備されているのは、対イングランドのためであるとの説明を受けて、安堵している。24-(1), fol. 1131.

⁽⁴¹⁾ 8, S. 128; 20, fol. 17r; 24-(1), fol. 1251, 1281, 131r. 8 は船賃を各自 2～4 メディン、20 は船賃を各自 1 ドゥカートであったとするが、この大きな違いの理由も不明である。

⁽⁴²⁾ 1, S. 282b-299b; 2, S. 272 f.; 5-(1), p. 302; 8, S. 84 f.; 12-(1), p. 27 f., 144; 15, fol. 561; 16, p. 41; 17-(1), p. 100, 326; 18, fol. 17-25; 20, fol. 19r; 22, fol. 40r; 23, fol. 45r; 24-(1), fol. 224r. 18 によると、トリポリで支払った税額は 4 ツェキーノと 10 メディンであった。なお、20 はトリポリにて在地のフランチェスコ会士と出会うことができるという幸運を得た。

のため」*pro nostra pecunia*であった⁽⁴³⁾。このような状況下で、トルコ人たちに対する激しい憎悪をむき出しにしているのが、共にイタリア人である7と17である。7は、そこでは「トルコ人とムーア人のならず者たちが」*canaglia de turchi et mori* キリスト教信仰を否定し、ムハンマドの「悪しき法」*maledetta lege*を信じたがり、多数のキリスト教徒を死に追いやっている、と記す。17は、多数の人々で賑わうトリポリの状況を、「敵」*nemici*であるトルコ人から逃れてきたユダヤ教徒やキリスト教徒も多数混在する「ムハンマドの偽の法」*la falsa legge di Maometto*の世界と表現する⁽⁴⁴⁾。ただし、イスラーム信仰やムスリムへと結びつけた上でこのような負の感情を表に出すのは、この2人に限定される。

さて、多くの巡礼者たちは、トリポリを拠点としてレバノン山、アレppoやダマスカスへのエクスカージョンを楽しんだが、その際にもバイレル・ベイもしくはサンジャク・ベイ、およびイエニチェリ（兼通訳）の監視下に置かれ、馬代を徴収された上に各所で税を支払った⁽⁴⁵⁾。22の場合は、レバノン山にて現地人に捕らえられたとある貴族の保釈金を負担せざるをえなくなった。また20にとって、トリポリからアレppoに向かう際に護衛代金と通訳代を支払った上で、カーディーにも金銭を支払うのは二重払いであった。移動の間にはワインも飲めず、度々護衛代金を追加徴収された上に、道中に現れたアラブ人にも通行税として100クローネも支払わねばならなかった⁽⁴⁶⁾。ただし、このような状況に負の感情を付け加えるのは、5と17の2名のみである。5は、レバノン山に居住するムーア人は「残虐である」*cruel*と、17はダマスカスの町そのものを「大悪党の巢窟」*habitata da gran canaglia*と書き加えている⁽⁴⁷⁾。しかしその一方で、17はアレppoの模様について、そこに居住するキリスト教徒たちはトルコ人に煩わされることなく自由を享受しており、彼をアレppoまで護衛してくれたバイレル・ベイおよびイエニチェリを「正義」*giustitia*、とも記している⁽⁴⁸⁾。このような、護衛に対する対極的な見方については、また後で考えてみたい。

さて、1のように、巡礼者の中にはトリポリからバグダードまで足を伸ばす者もいたが、

⁽⁴³⁾ 12-(1), p. 29.

⁽⁴⁴⁾ 7, pp. 65-67; 17-(1), p. 43.

⁽⁴⁵⁾ 1, S. 286a, 317b; 2, S. 275; 3, p. 295; 5-(1), pp. 305-315; 12-(1), p. 31; 15, fol. 61r; 17-(1), pp. 331-333; 18, fol. M; 19, fol. 180r-181r; 24-(1), fol. 232r f. ただし5は、ダマスカスにて税を徴収されるのは「ドイツ人」*Allemans*のみであると記す。

⁽⁴⁶⁾ 22, fol. 82r f.; 20, fol. 38l-41r. ただし、1550・60年代とは異なり、当該時期では巡礼記者自身がか捕虜・奴隷とされた例はない。拙稿「後期十字軍再考(8)」72~76頁。なお、他に当該時期において捕虜・奴隷について触れるのは、上記の12に加えて、トリポリにて負債のために奴隷とされたB-3と出会い、その身を案ずる1のみである。1, S. 317a, 320b.

⁽⁴⁷⁾ 5-(1), p. 305; 17-(1), p. 77.

⁽⁴⁸⁾ 17-(1), pp. 329-333.

その際にもカーディーの発行する「通行許可書」Passzport が必要であった⁽⁴⁹⁾。このように、また先に見触れたキプロスからトリポリへの移動の際にもそうであったように、従来から必要であったスルタン発行の「安全保証書」Salvi condictus⁽⁵⁰⁾に加えて、行政管区をまたいでの移動の際にはカーディーの発行する通行許可書が必要となったことも当該時期に見られる変化の一つである。上に見た 20 の言う二重払いとは、恐らくは通行許可書の発行代であったのであろう。また、話を 1 に戻すと、トリポリとバグダードとの往復の間、随所において、通行許可書を提示した上でもなお通行税や入市税などを徴収された。ムスリムを「殺人者にして盗人」Mörder unnd Räuber として恐怖感を抱く 1 にとって、金銭の支払いは諦めに近いものがあったのかもしれない⁽⁵¹⁾。

トリポリを後にした巡礼者たちは、当然のことながらエルサレムを目指すこととなるが、それには海路と陸路との二つの選択肢があった。陸路をとる場合、巡礼者たちはキャラバンに混じって移動したが、その際にも通行許可書が必要であった⁽⁵²⁾。この時に必要な代金について、18 は当初は 53 メディンと提示されたが、折衝の結果として 14 メディンまで減額されたことを記している。ただし、彼のように陸路をとる者は少なく、多くの者たちは、ライースの船に乗るという選択肢をとったが（表 2 も参照）、この場合はラムラのサンジャク・ベイがトリポリにまで迎えに来るのを待つ必要があった⁽⁵³⁾。乗船代について、2 は 3 ドゥカート、17 は 27～30 メディン、往路は陸路で帰路は海路をとった 18 は、「彼らの憎むべき慣習に従って」seconde il loro maladetto costume、「ラテン＝キリスト教徒」Christiani Latini は 1 ツェキーノを要求された、と記す。20 の場合、5 ドゥカートを支払ったが、それが通常よりも高いことを認識していたのであろう、「我慢」Patientz と記している。フランス人になりすましていた 8 の場合、乗船前にフランス人と、イタリア人・ポーランド人などが分けられた上で、前者に属する 19 人の巡礼者たちで合計 36 クローネ（船賃 20 クローネ＋護衛代金 16 クローネ）が徴収された⁽⁵⁴⁾。なお、17 は巡礼者にとっての必需品の中に、ライースに渡すワインを挙げている⁽⁵⁵⁾。当該時期の巡礼記作者の中で、この

⁽⁴⁹⁾ 1, S. 296b, 301b, 308a-309a. なお、3 はアレppoやバグダード行きを考えるも、オスマン帝国とサファヴィー朝との関係の悪化を考慮して断念している。3, p. 297.

⁽⁵⁰⁾ 2, S. 100; 4, p. 213.

⁽⁵¹⁾ 1, S. 299b-313a.

⁽⁵²⁾ 3, p. 278; 6, fol. 317; 18, fol. 59-64.

⁽⁵³⁾ 1, S. 321b; 2, S. 267; 8, S. 86; 17- (1), p. 6, 47, 307, 362; 18, fol. K f., 188 f.; 20, fol. 211-241; 22, fol. 451 f.; 24- (1), fol. 137l. ここでも 1 は、船上から見るムスリムの群れを、「殺人者」・「盗人」の大群として恐怖する。1, S. 322a.

⁽⁵⁴⁾ 8, S. 123. ただし、帰路のヤッファからトリポリへの船賃として彼が支払ったのは、わずか 2 メディンであった。

⁽⁵⁵⁾ 17- (1), p. 29 f.

時に最も悲惨な目に遭っているのが、22である。彼は、食事代別 60 トルコ・ドゥカート = 25 エキュ⁽⁵⁶⁾ の船賃を支払ったが、乗船時に棒を持ったムーア人に捕まり、殴られた挙げ句に 2 メディンを支払うよう強要された。次には役人にも地面に投げ倒され、金銭を巻き上げられた。彼の場合、フランス人としての恩恵を享受できなかったようである。

3. 護衛と心付け

上に記したように、キプロスを経由することが一般的になるのは 1580 年代からであったが、キプロスからトリポリを経由してヤッファに至るのが一般的となるのも 1580 年代に入ってからである⁽⁵⁷⁾。1570 年代に旅をした者たちの場合、2・3・6 のようにイスタンブル、5 のようにアレクサンドリアを経由して聖地に至るのが、通例であった（表 2 を参照）。外交使節の 6 は当然のこととして、2 もイスタンブルの状況を語るのに「正義」*Justitia* という言葉を用いており⁽⁵⁸⁾、同市を訪れた巡礼者たちにとってその治安は良好に感じられたようである⁽⁵⁹⁾。聖地より先にエジプトに降り立ってシナイ山巡礼を行った 5 は、対アラブ人のために「護衛」*garde* に当たってくれたカイロのベイレル・ベイを「キリスト教徒の敵である素振りを全く見せない誠実な人」*honneste homme, ne se môstroit point enemy des Chrestiens* として絶賛し、ロゼッタのムーア人やトルコ人を「非常に慈善的である」*tres charitable* とし、アレクサンドリアの状況を「正義」*Iustice* が守られているとしている。彼はまた、単独行動した際に現地人に「トルコ人かフランク人か？」*Turco ou Frange?* と聞かれた上で叩かれるという経験から、イエニチェリと共に行動しないことの危険性を認識していた⁽⁶⁰⁾。その他のエジプトを訪れた者たちの記述も、ここで見ておこう。エジプト経由でシナイ山巡礼を行う場合、カイロに立ち寄る必要であったが、ここでも巡礼者を管理・監督していたのはカーディーであり、2 によると彼から通行許可書を発行してもらうのには 2 ドゥカートを要した。しかしその一方で、19 はカイロのカーディーをやはり「正義」*justicia* とも記す⁽⁶¹⁾。5 と同様に 7 も、護衛の様子を、巡礼者たちをアラブ人の危険から守っ

⁽⁵⁶⁾ 24 によると、1 エキュ = 80 メディンであった。24-(1), fol. 261l.

⁽⁵⁷⁾ この背景として、1579 年にトリポリ（タラプス・アッシャーム）州が新設されたことがあったのであろう。ただし、それは必ずしもトリポリ周辺域の治安の安定を導いたわけではなかったようである。佐藤次高編『世界各国史 8 西アジア史 I アラブ』山川出版社、2002 年、354～355 頁。

⁽⁵⁸⁾ 2, S. 48, 86. なお、イスタンブルでも巡礼者の管理等を行っていたのは、カーディーであった。2, S. 58, 87, 97.

⁽⁵⁹⁾ 3, p. 94; 6, fol. 55, 93; 5-(1), p. 489; 18, fol. 206, 309 f.

⁽⁶⁰⁾ 5-(1), p. 25, 42, 84 f., 170, 207, 212. ただしその一方で、護衛を監視とも捉えている。

⁽⁶¹⁾ 2, S. 186; 15, fol. 49r, 51l; 5-(1), p. 62; 19, fol. 21r, 25r. なお 2 によると、シナイ山への往復に要したのは、護衛代、通訳代、ラクダ代を合わせて 11 ドゥカートであった。2, S. 177. また 3 は、ダミエッタへの入港税が 4 ドゥカートであったと記す。3, p. 240.

てくれる「良き引率者」bone guida と賞賛する⁽⁶²⁾。このように、金銭を支払った上のことではあるが、巡礼者たちはバイレル・ペイを始めとする役人たちの護衛、とりわけシナイ山に向かう道中に度々現れるアラブ人たちから守ってくれることに対して、少なくとも大きな不満は持っていなかったようである⁽⁶³⁾。

イスタンブル、アレクサンドリア、トリポリのいずれを経由しようとも、聖地巡礼者たちにとってのエルサレムへの入り口は、従来と同様にヤッファもしくはラムラであった⁽⁶⁴⁾。すなわち、ヤッファにて巡礼者たちは旧来の巡礼ルートに乗るのである。まずは、悲惨な形でトリポリを後にした 22 の記述を中心にして、ヤッファからエルサレムに至るまでの巡礼者たちの状況を再構成してみよう。二つの塔を除いて廃墟と化したヤッファに降りたった巡礼者たちを出迎えていたのは、ラムラのサンジャク・ペイと多数のイエニチェリ、そしてやはりカーディーであり、また 9 ドゥカート of 税の支払いであった⁽⁶⁵⁾。税の支払いが終わって通行許可書が発行された後⁽⁶⁶⁾、「不正」*tort* をなすトルコ人たちは巡礼者たちにパンとワインと「心付け」*courtoisies/cortesia/Cortesia*⁽⁶⁷⁾ を要求してきた。各自 2 メディンの心付けを渡すと、トルコ人たちはさらに心付けを要求してきた。4 の場合、バイレル・ペイに食料などの所持品を取り上げられた上に、公衆の面前で馬から引きずり下ろされ、殴打された。彼は跪いて、「旦那様、御慈悲を」*Grand mercie Signior* と叫ぶしかなかった⁽⁶⁸⁾。ヤッファを後にしてラムラに向かう道中、護衛であるはずの弓矢隊から嘲りや投石

⁽⁶²⁾ 7, p. 79.

⁽⁶³⁾ 2, S. 119, 134, 154; 3, p. 164, 181; 6, fol. 254; 12-(1), pp. 154-159, 174-177, 220-222; 19, fol. 8r-14l, 16l, 32l, 34r f., 37l, 41l, 46l, 52l; 20, fol. 52l, 60l; 21, fol. K7l f.; 24-(1), fol. 271l, 272r, 266l, 274r. 例外としては、12 がアレクサンドリアの港にてキリスト教徒が奴隷として売買されている光景を見て不安を覚えたこと、19 がカイロからダミエッタの道中に現れたアラブ人集団に対して、イエニチェリの進言によって通行税を支払ったこと、のみが挙げられる。12-(1), p. 218; 19, fol. 53l. また、シナイ山への道中におけるアラブ人強盗団からの襲撃や通行税の強制徴収といった危険については、2, S. 179, 184, 186, 205; 3, p. 203, 209, 213, 228 f., 237; 5-(1), pp. 171-179; 19, fol. 186r, 191l, 193r, 196l; 20, fol. 53r. 中でも 3 は、1578 年にドイツ人の巡礼団がアラブ人盗賊団に襲撃された事件について触れている。

⁽⁶⁴⁾ 都市間の移動にかかる経費については、イスタンブルからアレクサンドリアまで、ライースの船に乗った 2 によると、イエニチェリに支払う護衛代を含めて 9 ドゥカートであった。2, S. 99-102. なお彼は、ダミエッタからヤッファに移動する際、ライースの船には 50 人のイエニチェリが同船したと記している。2, S. 211. 2 と同様に、多くの者たちは港町間の移動に際してライースの船に乗ったようである。3, p. 240; 14, fol. Aiiil; 20, fol. 43l-46l; 24-(1), fol. 261l. ただし 6 は、アレクサンドリアからヤッファまでの船賃として通訳代込みで 5 ドゥカート支払っているが、その船のパトロンはフランス人であった。6, fol. 276-278. 18 も、トリポリからイスタンブルへの移動に際してはヴェネツィア商船に乗った。18, fol. 197-201. 24 が、アレクサンドリアからザンテまでの移動に当たってギリシア人をパトロンとする船に乗ったことは、先に触れたとおりである。なお、3 はトルコ人やムーア人の航海技術の低さについて記している。3, p. 166.

⁽⁶⁵⁾ 1, S. 323b f., 341b; 2, S. 212-214; 5-(1), p. 228; 9, fol. 7 f.; 10, S. 156; 17-(1), p. 105 f.; 20, fol. 25l; 23, fol. 12l-13l; 24-(1), fol. 129l.

⁽⁶⁶⁾ 9, fol. 9 f.; 23, fol. 16l.

⁽⁶⁷⁾ 22, fol. 48; 17-(1), p. 122; 20, fol. 27l; 24-(1), fol. 146l f.

⁽⁶⁸⁾ 4, p. 208.

の嫌がらせを受けたにもかかわらず、巡礼者たちはまたもや心付け（各自1エキュ）を要求された。巡礼者たちは、ただ「我慢」*patience* するしかなかった⁽⁶⁹⁾。ラムラに至り、半ば廃墟と化したフィリップ善良公の巡礼宿に落ち着いた所、バイレル・ベイが現れて税と共に心付けを要求してきた⁽⁷⁰⁾。ラムラ周辺には、当該時期にも巡礼者たちから金品を巻き上げようとするアラブ人が巣くっていたが、アラブ人の部族長にも心付けを支払わねばならなかった⁽⁷¹⁾。さらにその後に、護衛たちはまたもや「棒で叩く素振りを見せて脅しながら」*avec danger de coups bastons*, 22 メディンの心付けの支払いを強要したのであった⁽⁷²⁾。ようやくのことでエルサレムに到着すると、バイレル・ベイ、もしくはエルサレムのサンジャク・ベイによる名前等のチェックを受けた上で、巡礼者たちは入市税の2ツェキーノを支払って「観光許可書」*priviegia* を発行してもらったのであるが、その後にまた役人やカーディーに金銭を支払わねばならなかった⁽⁷³⁾。中でも、エルサレムのサンジャク・ベイに対して激しい辛辣な記述をしているのが18である。18によると、現地のフランチェスコ会士を苦しめている同サンジャク・ベイは、「犬」*Canis* にして「悪魔の精神」*Spiriti Diabolici* の統率者であり、「害悪」*Peste* に他ならなかった⁽⁷⁴⁾。トリポリからエルサレムまで陸路を選択した巡礼者も同様の経験をした。18によると、まずナブルスにて「憎むべきサンジャク・ベイ」*maladetto Sangiach* に多額の金銭を巻き上げられたが、「我慢」*patienza* するしかなかった。ナザレでも、役人に「多額の心付け」*molte cortesie* を要求され、エルサレム入場時にも2ツェキーノの税に加えて心付けを支払わねばならなかったのである⁽⁷⁵⁾。

巡礼にとって最大の目玉である聖墳墓教会への入場料は、基本的には9ドゥカートで

⁽⁶⁹⁾ 22, fol. 48l; 2, S. 214; 3, p. 242; 7, p. 67; 8, S. 87; 24-(1), fol. 146r. 2の場合、支払ったのは2ドゥカートであった。

⁽⁷⁰⁾ 22, fol. 49l; 23, fol. 14l f.; 24-(1), fol. 138l f. 他にフィリップ善良公の巡礼宿については、1, S. 324a; 2, S. 216; 7, p. 68; 24, fol. 143r.

⁽⁷¹⁾ 22, fol. 49 f.; 1, S. 324a; 3, p. 244; 4, p. 209; 5-(1), p. 229; 16, p. 48; 17-(1), p. 113, 122 f.; 20, fol. 26l, 30r; 23, fol. 14l; 24-(1), fol. 144r f. ラムラ周辺域におけるアラブ人の恐怖・危険については、3, p. 243; 4, p. 209; 5-(1), p. 232-234; 6, fol. 80; 7, p. 68; 16, p. 47 f.; 17-(1), p. 120; 20, fol. 31l; 22, fol. 48l.

⁽⁷²⁾ 22, fol. 49l-50l; 2, S. 219; 3, p. 244; 17-(1), p. 46, 50; 20, 26l-29r; 24-(1), fol. 141l, 143l f. 2の場合は0.5ドゥカート、3の場合は殴られた上での1ドゥカート、20も1ドゥカート、24は5ツェキーノであった。17に至ると、ラムラとヤッファの往復に30ドゥカートも要したと記している。なお、20は他の支出も詳細に記しており、ムカーロ（ロバ係）や水調達係にそれぞれ2〜3メディン、スペインディトーレ（食料買い出し係）に3ツェキーノを支払ったとしている。

⁽⁷³⁾ 22, fol. 52l; 1, S. 330a; 2, S. 217; 4, p. 209; 5, pp. 231-235; 7, p. 69; 8, S. 88; 9, fol. 10 f.; 17, p. 125, 130, 138; 20, fol. 33l; 24, fol. 146r f.

⁽⁷⁴⁾ 18, fol. 180 f.

⁽⁷⁵⁾ 18, fol. 71, 77, 83, 91-93, 106. 他に同様の記述は、22, fol. 79l; 6, fol. 278-287.

あったが⁽⁷⁶⁾, 加えて 2～5 ドゥカート⁽⁷⁷⁾の心付けを要求される者もいた⁽⁷⁸⁾。さらに 8 の場合は、役人からの暴行も受けている⁽⁷⁸⁾。19 によると、聖墳墓教会の中には「当地の裁判官」*justicia mayor de aquella tierra* であるカーディーの館が置かれており⁽⁷⁹⁾, 17 に言わせると、聖墳墓教会は「トルコ人の監獄」*la priggione de Turchi* であった⁽⁸⁰⁾。また 22 にとって、聖墳墓教会の鍵を握るのは「悪魔の僕たち」*serviteurs du Diable* たる「不敬者たち」*infidels* であり、後述するが、彼の場合この記述に続いて聖地回復の希望が盛り込まれることとなる⁽⁸¹⁾。ただし、前稿で確認したような巡礼者たちに大きな負の感情をもたらした 1551 年のトルコ人によるシオン山占拠について感情的に記すのは⁽⁸²⁾, 共にイタリア地域出身である 16 と 18 のみである。とりわけ 18 にとって、シオン山に聳えるモスクは「悪魔の塔」*Turo Satane* であった⁽⁸³⁾。しかし、その他の被害者たちが何も感情的な記述を残していないのは、24 が記すように、約束以上の金銭を要求されることはオスマン帝国全域ではごく普通のことである⁽⁸⁴⁾, という諦めにも似た認識を巡礼者たちが共有していたからであろうと考えられる。そして、護衛による心付けの強要、護衛がいる状況下でのアラブ人やトルコ人に対する通行税や心付けの支払い、それにもかかわらずさらなる心付けを要求してくる護衛、という構図は随所で繰り返される⁽⁸⁵⁾。具体例を一つ、聖誕教会における 24 の記述から見てもよい。同教会は「粗野な」*rustiques* トルコ人・アラブ人によって占拠されており、巡

⁽⁷⁶⁾ 1, S. 333b; 2, S. 224 f.; 3, p. 248; 5-(1), p. 237, 240; 6, fol. 292; 7, p. 77; 9, fol. 21; 12-(1), p. 49, 56, 114 f., 124; 16, p. 50 f., 68; 17-(1), p. 212, 256; 18, fol. 121-124, 157; 19, fol. 99l, 101l-103l, 145l f.; 20, fol. 33r-34r; 21, fol. C7r; 22, fol. 52l; 23, fol. 32r-33r; 24-(1), fol. 169r, 187r f. 19 によると（明らかに彼は聖墳墓教会のことをソロモン神殿と誤記しているが）、9 ツェキーノ（＝9 ドゥカート）を払わされるのはラテン人のみであり、他のキリスト教徒は半額であった。加えて、巡礼者たちは、ガーディアンにも 1 ドゥカートを献金した。2, S. 223; 3, p. 250. なお、2 は「忌々しいルター派」*verfluchte Lutherum* を自由に受け入れているガーディアンを批判し、3 はアナ・バプテストの巡礼者をネストリウス派と同列視している。2, S. 222 f.; 3, p. 250.

⁽⁷⁷⁾ 1, S. 333b, 336a f.; 2, S. 224 f.; 5-(1), p. 240; 18, fol. 121. 18 は加えて、聖地のフランチェスコ会が年間 400 ツェキーノを搾取されていると記す。18, fol. 121.

⁽⁷⁸⁾ 8, S. 121.

⁽⁷⁹⁾ 19, fol. 101l-103l.

⁽⁸⁰⁾ 17-(1), p. 188, 212, 256.

⁽⁸¹⁾ 22, fol. 66l.

⁽⁸²⁾ 拙稿「後期十字軍再考（8）」77～79, 83 頁。

⁽⁸³⁾ 16, p. 50 f.; 18, fol. 138, 100. なお、16 はヨサファ谷に設置されたモスクを見張り台と表現している。16, p. 49. ただし 18 は、ラムラのサンジャク・ベイがガーディアンに大量の桃を差し入れていることも記している。18, fol. 143.

⁽⁸⁴⁾ 24-(1), fol. 169r.

⁽⁸⁵⁾ ベタニア：1, S. 333a; 8, S. 107. ベツレヘム：2, S. 256; 3, p. 269, 272, 275; 8, S. 110; 9, fol. 38 f.; 12-(1), p. 91; 17-(1), p. 53 f., 151, 254; 18, fol. 153; 19, fol. 154r, 157l, 159l; 22, fol. 78l; 24-(1), fol. 166l. エルサレム近郊：2, S. 245; 5-(1), p. 272 f.; 8, S. 94 f., 100; 12-(1), p. 85, 109, 112; 17-(1), p. 150; 19, fol. 68l, 175l; 23, fol. 17l, 21l, 24l f., 38r, 40r f., 44r f. その他：3, p. 287; 6, fol. 317-321; 9, fol. 55 f.; 12-(1), p. 29, 42, 45, 48, 127 f.; 16, p. 69, 80; 17-(1), p. 32; 18, fol. 79, 82; 19, fol. 172r, 183r; 22, fol. 79l; 24-(1), fol. 163r, 195l-197l, 198r f., 201r, 219l-220r. 22 によると、ベツレヘムにて現地のトルコ人から投石された結果、同行者の女性が重傷を負った。

礼者たちは入場税を要求された。護衛に言われるがままに金銭を払ったが、その後になぜか護衛から心付けを要求され、巡礼者たちはただだ「憂鬱」ennuyになるばかりであった⁽⁸⁶⁾。さらに場合によっては、巡礼者たちは教会への入場を禁止・制限されたり、宗教儀礼を妨害されたりした。12によると、トルコ人たちはキリスト教徒を「犬」cânesと呼び、公での儀礼を禁止していたのであり、巡礼者たちにとって護衛はまさに「監視人」inspectoresであった⁽⁸⁷⁾。特に大きな被害に遭ったのが、死海方面へと足を伸ばした巡礼者たちであったが、16に至っては、アラブ人に金銭を巻き上げられた上で、護衛に300ツェキノという法外な金銭を支払わねばならなかったのである⁽⁸⁸⁾。

いわゆるホーリー・エクスカーションの中で少々搾り取られた巡礼者たちであったが、帰りにラムラを経由してヤッファに至るまでもさらに金銭を巻き上げられた⁽⁸⁹⁾。トリポリまで陸路を選択した者たちにも、同じような運命が待ちかまえていた。陸路を選択した場合にはキャラバンに混じって移動したのであるが、22の場合、すでにラムラにてベイレル・ベイに7ツェキノもの金銭を要求されたものの、手持ちの現金が枯渇していたために身ぐるみ剥がされてしまった。そして、その後の道中での数多くの「悪意」meschansによって、彼は完全に打ちひしがれてしまった。中でも酷かったのが「残酷、醜悪にしておぞましい（キャラバンの）隊長」captain cruel, hideux, espouventableであり、巡礼者たちを棒で殴打しながら幾度となく金銭を搾取し、最終的には総額5ドゥカート巻き上げた。加えて、巡礼者たちは次々に現れるアラブ人の集団にも、通行税や心付けを支払わねばならなかったのである⁽⁹⁰⁾。

ヤッファにて税を支払えば「旅の自由の中に」in Frieden unser Reyß入れるとし、ダマスカスからトリポリまでの道のりで案内人を務めたアラブ人を「良き人」guten Mannとする、外交使節の6を唯一の例外として、このような状況において、巡礼者たちが護衛や案内人に対して好印象を抱くはずもなかった。ただし、必ずしも全ての巡礼記者が、トルコ人の役人などに対する嫌悪感を露わにするわけではない。以上に見てきたように、オスマン帝国における政治中枢のおよび商業的機能を持つ大都市においては、治安が悪くなかったこともあり、役人に対する巡礼者たちの評価は良好であった（イスタンブル：2・6、ダマスカス：17、カイロ：5・7・19）。その一方で、確かに聖地巡礼のルート上では、治

⁽⁸⁶⁾ 24-(1), fol. 195l-197l. 他に、12-(1), p. 93, 102 f.; 22, fol. 55l; 23, fol. 43r.

⁽⁸⁷⁾ 12-(1), p. 85 f., 102 f. 132. 他に、24-(1), fol. 191r f.

⁽⁸⁸⁾ 12-(1), p. 99 f., 108; 15, p. 106, 108; 16, p. 87; 17-(1), p. 265; 18, fol. 154; 19, fol. 59r, 146l-147l; 24-(1), fol. 167l-168l.

⁽⁸⁹⁾ 3, p. 285; 5-(1), p. 290; 6, fol. 314; 8, S. 122 f.; 12-(1), p. 130 f.; 20, fol. 35r-36r; 24-(1), fol. 226r.

⁽⁹⁰⁾ 22, fol. 50l, 79r-81r. 他に、18, fol. 184-187.

安が維持されていないばかりでなく、巡礼者たちは搾取の対象であった。この点については従来と大きな違いはなかったが、オスマン帝国によるキプロス占領の結果としての「関所」の増加（ヴァローナ→キプロス→トリポリ→ヤッファ）は苦難の道をより長くし、また当該時期において導入されたカーディー（および彼が発行する通行許可書）による巡礼者の管理は、経済的負担をより大きくした。このような状況に対して、5・7・16・17・18・19・22・24 は、役人等への嫌悪感を露わにするのであるが、このような感情を持つのがイタリア地域出身者（7・16・18・および 17 もここに加えることができよう）、フランス地域出身者（5・22・24）、およびスペイン地域出身者（19）、すなわちカトリック圏内の者たちに限定されるのである。その他の者たちが沈黙しているのは、事前の覚悟および「心付け」という新たな搾取手段が、巡礼者たちに忍耐する以外には諦めと恐怖という感情しか植え付けなかったからであろう。

では、このような経験に基づく感情は、7・16・17・18・22・24 にすでに垣間見られるように、反イスラームや反ムスリムといった感情と結びつくことになったのであろうか。次章にて確認したい。

II. ムスリム観・イスラーム観

1. イスラーム信仰

当該時期においても聖地巡礼を行った者たちの幾人かは、目の当たりにしたイスラーム信仰について記述しているが、それはクルアーンに関する記述とムハンマドに関する記述との二つに大きく分けられる。

まずは前者について見てみると、そのほとんどがワインを飲むことの禁止や一夫多妻制といったおきまりの内容を客観的に述べるに留まるが、19 は「ムハンマドの聖クルアーン」*Alcoran sancto de Mahoma* と記していることを付記しておきたい⁽⁹¹⁾。逆に若干ながらの負の表現を用いるのは、そのクルアーンに関する長文の中で「忌まわしい」*abomidable* という形容詞を一度のみ使用している 5 と、クルアーンを「迷信」*superstitio* とする 17 の 2 名である⁽⁹²⁾。そして、クルアーンを「悪魔」*il Diauolo/le Diable* による唆し、とまで表現しているのが 18 と 24 である。18 はその内容を誤謬ばかりの迷信とし、むしろクルアーンから

⁽⁹¹⁾ 2, S. 50, 60; 3, p. 77, 112, 161; 6, fol. 177-211; 19, fol. 98l. なお、19 はドルーズ派についても紹介している。19, fol. 179r f. その一方で、彼のみが依然としてイスラーム信仰を偶像崇拜としても紹介している。19, fol. 34l, 47l.

⁽⁹²⁾ 5-(1), pp. 74-137（件の形容詞の使用は p. 111）; 17-(1), p. 38, 161, 254（件の表現の使用は p. 161）。

トルコ人の破滅を予言し、24 はその怒りの矛先を三位一体の否定に注ぐ⁽⁹³⁾。

次にムハンマドに関する記述を見てみよう。ムハンマドについても同様であり、多くの者は客観的な記述に留まる⁽⁹⁴⁾。軽度のネガティブな表現を付加するのは、一カ所で「神を冒瀆する預言者ムハンマド」*Gtteslästerlichen falschen Propheten Machomet* と、また別の一カ所で「偽預言者ムハンマド」*faschen propheten Machomet* と記す 2、および同じく一カ所において「偽預言者ムハンマド」*falso Propheta Mahometo* と記す 19 と、「憎むべきムハンマド」*maladetto Mauchmet* と記す 21 の 3 名である⁽⁹⁵⁾。そして、ムハンマドに対する敵意を表に出すのが、やはり 18 と 24 の 2 名である。まず彼らは、ムハンマドの名を記す場合、枕詞のように「偽預言者」*falso Profeta/faux prophete* という表現を付け足す⁽⁹⁶⁾。さらに 18 は、サリーネ（現ラルナカ）の聖ラザロ教会について、バイレル・ベイが同教会を家畜小屋として使用しているのみならず、「大嘘つきの預言者にして大サタンの一部をなすムハンマド」*bugiardissimo Profeta Maometto, membro del gran Satanasso* に同教会を捧げていることを嘆いている。彼がシオン山のモスクを「悪魔の塔」と表現したのは上に見たとおりであるが、加えて彼は、スレイマンが改築したソロモン神殿を「大サタンの美しいモスク」*bene Moschea del gran Satanasso* としてその造形美を讃えると同時に、イスラーム信仰に対する嫌悪感を表している⁽⁹⁷⁾。

さて、1570 年以前の聖地巡礼者と同様に、当該時期の者たちもキリスト教教会の多くが破壊されている⁽⁹⁸⁾、もしくはモスクなどと化している⁽⁹⁹⁾のを目の当たりにし、その結果としてそこに立ち入ることができない⁽¹⁰⁰⁾、もしくは立ち入るのに多額の金銭を要求された

⁽⁹³⁾ 18, fol. 253-258, 278-285, 290-292; 24-(1), fol. 202l-207r, 253r-255l.

⁽⁹⁴⁾ 1, S. 327b, 329a-330b, 335, p. 59, 116-137, 321; 6, fol. 177-211; 17-(1), p. 183, 327.

⁽⁹⁵⁾ 2, S. 18, 60, 107 f., 173, 183, 245 f. (件の表現の使用は S. 183, 245 f.); 19, fol. 28l, 46l f., 50r, 88r f., 98l (件の表現の使用は fol. 46l); 21, fol. L5r-L6r.

⁽⁹⁶⁾ 18, fol. 43, 223, 245, 253-258, 263-275, 278-283; 24-(1), fol. 101l, 167l, 270r. 例外として、24-(1), fol. 230l.

⁽⁹⁷⁾ 18, fol. 14, 175. 彼はもう一カ所で「悪魔」*Satansso* と表現している。18, fol. 90 f.

⁽⁹⁸⁾ 3, p. 220 f.; 7, p. 82; 8, S. 88, 100, 107 f., 110, 122; 9, fol. 29 f.; 15, fol. 57l; 22, fol. 48r, 77l; 24-(1), fol. 121r, 131l.

⁽⁹⁹⁾ 1, S. 320b, 327a f., 329a-330b, 343b; 2, S. 66, 190 f., 245 f., 248, 253 f.; 3, p. 221, 223, 260, 262, 267-269, 279, 284; 5-(1), p. 230, 260, 265, 274 f., 279, 282; 6, fol. 319; 8, S. 88, 98, 100, 104; 9, fol. 25, 29 f., 37; 12-(1), p. 43 f., 59 f., 81-84, 97, 110, 113, 125, 209; 13, fol. 33l; 16, p. 54, 56-58, 72, 75, 94, 95; 17-(1), p. 131, 138, 141 f., 163, 171, 173, 180, 190, 227, 231, 279; 18, fol. 96, 99, 100, 102, 104, 108, 112, 115, 118, 172, 175, 223, 225, 232; 19, fol. 56r-58r, 68l, 69l f., 70r f., 72l-76l, 76r f., 91l-94l, 183l, 134r-140r, 142l, 145r, 152l, 170l, 173r; 21, fol. F2l, F3l, I2r; 22, fol. 46l, 51r, 52r, 61l; 23, fol. 19l, 24l f., 25r, 28l, 31lf.; 24-(1), fol. 131l, 142l, 147r-149l, 150r f., 152r, 156r-158r, 160l f., 162l-164l, 165l-166l, 167r, 169r, 172r, 191l, 228l, 229r, 230l f., 250r, 253r, 277l, 292r.

⁽¹⁰⁰⁾ 3, p. 260, 279; 8, S. 88, 98, 104, 107 f., 110; 9, fol. 25; 12-(1), p. 59, 125; 17-(1), p. 237; 18, fol. 96, 99, 112, 118; 19, fol. 76r f., 91r-94l, 183l, 145r, 152l; 21, fol. F2l, F3l; 22, fol. 51r, 52r, 61l; 24-(1), fol. 156r-158l, 229r, 277l.

上に宗教儀礼が制限された⁽¹⁰¹⁾ことを記している。確かに、当該時期において、聖所の一部の管理権がカトリック教会の下に移されたことを記す者もいる⁽¹⁰²⁾。また、自由に入出入りできるモスクについて記す者もいる⁽¹⁰³⁾。ただし、このような記述を残す者はごくわずかである。しかし同様に、このような情報の中で、ネガティブな表現を付け用いる者も決して多くなく、それは「不敬の」*gottlose* という形容詞を付け加える 8、ムスリムを「不敬者」*ungläubigen* と表現する 9 や、「犬」*Cani* と表現する 18 と 21、シドンの荒廃の原因を現地住民の「悪意」*malignité* によるものとする 24、および 22 に限定される⁽¹⁰⁴⁾。

22 はソロモン神殿に関する記述の中で、次のように記している。「今やそれは神の神殿でもソロモンの神殿でもなく、悪魔の神殿である。というのも、それは悪魔の僕であるトルコのモスクになってしまっているからである」*maintenant il n'est plus de Dieu ny de Salomon, mais du Diable ; car il fert de Mosquee aux Turcs, les serviteurs du Diable* と。この記述は上記の 18 や 24 と似通っているが、それは激しい憎悪を剥き出しにしているのが 18・22・24 の 3 人に限定されていることを示している。同じキリスト教教会のモスク化という文脈の中において、5 はその原因を「我らのキリスト教徒の諸侯たちの悪と怠慢ゆえに」*pour nostre mal & negligence des princes Chrestiens* という、全く逆の形で怒りの感情を表している⁽¹⁰⁵⁾。このような彼らの感情が聖地回復の希望などと結びつくことになったのであろうか、ということについては次章にて考えたいが、その前に巡礼者たちがムスリム全般をどのように見ていたのかについて確認しておこう。

2. イスラーム信仰の実践者としてのムスリム観

必然的に、聖地巡礼者たちは役人以外の現地人とも直接・間接に関わることとなったが、幾人かの者たちは、現地人の風俗について記しているが、特にイスラーム信仰と結びつけることはなく、かつやはりその多くが客観的な記述に留まる⁽¹⁰⁶⁾。唯一、主観を織り交ぜる 24 は、アラブ人の生活を「惨め」*miserablerie* とし、かつアラブ人やトルコ人は「男色」

⁽¹⁰¹⁾ 5-(1), p. 265 ; 8, S. 111 ; 12-(1), p. 110 ; 18, fol. 115 ; 19, fol. 57r-58r, 69l, 140l, 142l ; 22, fol. 61l ; 23, fol. 24l f, 28l, 31l f ; 24-(1), fol. 160l f, 210r-12l.

⁽¹⁰²⁾ 2, S. 258 (ベツレヘムの厩) ; 23, fol. 18l (チェナコロの一部)。

⁽¹⁰³⁾ 12-(1), p. 60 (カイファの家とアンの家)。ただし、両者ともその管理権はアルメニア教会に移譲されていた。19, fol. 69l.

⁽¹⁰⁴⁾ 8, S. 107 f ; 9, fol. 29 f, 37 ; 18, fol. 172 ; 21, fol. 12r ; 22, fol. 51r ; 24-(1), fol. 224l f.

⁽¹⁰⁵⁾ 5-(1), p. 230. なお幾人かの者たちは、キリスト教勢力に対するオスマン帝国の勝利の原因として、その政治制度や軍制などの情報を盛り込むが、いずれも客観的な記述に留まっている。3, p. 96-100 ; 6, fol. 154-177 ; 18, fol. 258-263, 270-275 ; 24-(1), fol. 234l-235r, 238l-239l, 241l-246r.

⁽¹⁰⁶⁾ 2, S. 174 ; 5-(1), pp. 87-90, 171-179, 434-441 ; 6, fol. 177-211, 268-272 ; 12-(1), p. 30 f ; 18, fol. 285-290, 292-296 ; 22, fol. ciil ; 24-(1), fol. 207r-210r, 232r, 236l-237l, 240l, 249r.

sodomite に耽っていると。また、トルコ人は、一夫多妻制の下にあるにもかかわらず、実際には一人の女性を愛することも紹介する。ただし、彼らは妻を奴隷のように束縛していること、その一方で、フランスでは女性は大いに自由であることも付け加えている⁽¹⁰⁷⁾。

また、幾人かの巡礼者たちは沐浴やメッカ巡礼などの信仰実践についても触れているが、やはりその記述の多くも客観的なものに過ぎない⁽¹⁰⁸⁾。ムスリムの敬虔さについて触れる者もいるが、それは 12 のみである⁽¹⁰⁹⁾。逆に、アザーンを耳障りな「叫び」*clamore/crie* と表現する者もいるが、これも 18 と 22 のみである⁽¹¹⁰⁾。ムスリムの信仰実践に関する記述の中において当該時期にも多く見ることができるのが、ムスリムがイエスやマリアに対する崇拜を中心としたキリスト教的信仰の実践である⁽¹¹¹⁾。しかしやはり、そこに何らかの高評価が付け加えられることはまったくなく、逆に負の評価が付け加えられることもほとんどない。16 は、イエスを崇敬しつつもムスリムはその人性のみを「迷信的に」*superstiziosamente* 信じているとし、17 はムスリムがキリスト教的信仰実践をしているがために教会に入ることができなかったことを嘆き、22 はイエスを崇敬しながらもカルヴァリを嘲るトルコ人の存在を紹介する。そして 19 は、ムスリムによる聖誕教会に対する崇敬を、「嘆かわしい」*lamentable* ことと見なしている⁽¹¹²⁾。しかし、ムスリム全体に対して何がしかのネガティブな表現を加えているのは、トルコ人を「信仰の敵」*ennemys de la foy* とする 5、同じくトルコ人を「不敬者」*infideles* とした上で、ムスリム全体を「我々の聖なる信仰の敵モーロ人」*Moros enemigos de nuestra Sancta Fee* とする 13、ムスリム全体を「無知のムハンマド教徒」*ignorante Machometano* と表現する 18 のわずか 3 名に留まり、かつ彼らはそれぞれ一カ所においてでしかそのような表現を用いていないのである⁽¹¹³⁾。

以上、前章と併せて本章全体を通して見てみよう。イスラーム信仰およびその実践者であるムスリムに対する嫌悪感をわずかながらも覗かせるのは、巡礼という経験の中で嫌悪

⁽¹⁰⁷⁾ 24-(1), fol. 236r, 246r-248r, 282l f.

⁽¹⁰⁸⁾ 1, S. 280b f., 303a, 330b-332b ; 12-(1), p. 41, 135 f. ; 16, p. 86 ; 19, fol. 88r f. ; 21, fol. L5r ; 24-(1), fol. 155r, 165l.

⁽¹⁰⁹⁾ 12-(1), p. 200, 211.

⁽¹¹⁰⁾ 18, fol. 120 ; 22, fol. 42l-43l, 45r.

⁽¹¹¹⁾ 1, S. 329a-330b ; 2, S. 218 ; 3, p. 259, 265 f., 278 ; 5-(1), p. 129, 282 ; 12-(1), p. 64, 183 ; 17-(1), p. 124, 173, 180 ; 18, fol. 159, 162, 276-279, 278-283 ; 19, fol. 31l, 85r, 100l, 140l ; 23, fol. 18r, 28l ; 24-(1), fol. 160l-163r, 190l f., 192l, 210r-212l, 230l f., 232l, 250r. アブサロンに対するムスリムの敵意に関する記述は、17-(1), p. 156 ; 24-(1), fol. 161r. なお、18 と 24 の 2 名が、キリスト教棄教者に関して記述している。24 は、フランス人棄教者バロン・ド・ラ・フェが生き残るために棄教したことを紹介し、18 はイスタンブルからカンディアへ向かう船のライースであったヴェネツィア人棄教者を論したとする。24-(1), fol. 270r ; 18, fol. 311. また 18 は、イスタンブルにてキリスト教徒奴隷を購入して解放したとする。18, fol. 310.

⁽¹¹²⁾ 16, pp. 53-57 ; 17-(1), p. 237 ; 22, fol. 62l ; 19, fol. 163r f.

⁽¹¹³⁾ 5-(1), p. 13 f. ; 13, fol. 3r, 37l ; 18, fol. 90 f.

感を露わにした者たちに 2・8・9・13・21 が加わる。ただし、その中で際立った者となると、5・7・13・16・17・18・22・24 となり、やはりフランス・イタリア・スペイン地域出身者たちに偏ることとなる。では、聖地回復の希望という点にも、その傾向は反映されるのであろうか。

III. 十字軍観・聖地回復の希望

1. 聖墳墓の騎士

ゴドフロワ・ド・ブイヨン以来、多くの貴族たちが聖墳墓の騎士となるべく聖地に向かった、と 2 がその巡礼記の序文で記しているように⁽¹¹⁴⁾、俗人にとって、聖墳墓の騎士となることは最大の栄誉の一つであり、当該時期でも 1・2・6・8・9・12・15・17・20・24 と、ルター派の 6 を含めた多くの者が騎士叙任を受けた。2 と同様に、9 も巡礼記の冒頭において、巡礼の目的が「聖なるローマ教会の騎士」heiligen Römischen Kirchen Ritter になることであったと記す⁽¹¹⁵⁾。また、12 および 24 は、巡礼記を聖墳墓の騎士の規律で締め括っており、その思い入れが並々ならぬ物であったことを窺わせる⁽¹¹⁶⁾。特に 24 の場合、その規律（「聖地における教皇の総代理人にして、ガーディアンである福音者ヨハネ修道士の面前にて原本から書き写された、エルサレムのあるイエス・キリストの聖なる墳墓の騎士修道会の主導者にして総長であった皇帝・国王・フランスの諸侯たちの決定事項の写し」*Extraict des ordonnances des Empereurs, Roys, & Princes de la France, qui ont esté souuerains, & chefs de l'ordre des Cheualiers du saint Sepulchre de Iesus Christ, en Hierusalem, pris, & coppié sur l'original, ez presences de frere Iean Baptiste, gardien & commissaire general du Pape, en la terre Sainte*）が十字軍の呼びかけへと連動しているのであるが、この点については後述したい。

さて、ほとんどの者たちは単に儀礼の模様を記すに留まることとなるが⁽¹¹⁷⁾、我々は当該時期における二つの変化を読み取ることもできる。まず一つは、ガーディアンに対する支

⁽¹¹⁴⁾ 2, S. Aiiir–Aiiir.

⁽¹¹⁵⁾ 9, fol. Biil.

⁽¹¹⁶⁾ 12–(1), p. 301 f.; 24–(1), fol. 326l–345r. なお、17 もその巡礼記のほぼ終わりの箇所に、同船者であったフランスのバロンにして聖墳墓の騎士であったフィリップ・ド・メロートの墓碑銘を挿入している。17–(1), pp. 345–348.

⁽¹¹⁷⁾ 1, S. 341b–342b; 2, S. 237–241; 6, fol. 300–304; 8, S. 112–116; 9, fol. 45–53; 12–(1), p. 65–77, 301 f.; 15, fol. 56l; 17–(1), pp. 214–222, 345–348; 20, fol. 35r; 24–(1), fol. 174r–176r, 326l–345r. なお、聖墳墓の騎士の儀礼の詳細については、拙稿「14 世紀～16 世紀前半の聖地巡礼記に見る「聖墳墓の騎士」—儀礼へのフランチェスコ会の関与過程を中心に—」長谷部史彦編『中近世地中海世界の旅人と旅の記述』慶應義塾大学出版会、2014 年、185～215 頁、を参照。

払額の高騰である。1550・60年代にはその額は2ドゥカートであったが⁽¹¹⁸⁾、当該時期における支払額は、1によると11～12ドゥカート、2によると12クローネ、20によると8ツェキーンであり、約4～6倍となっている。オスマン帝国における物価の高騰がその背景にあるのであろうか。ただし同時に、1550・60年代に見られたような、トルコ人に支払う金銭（10ドゥカート）に関する記述が⁽¹¹⁹⁾、この時期には見られない。儀礼そのものにおけるトルコ人の管理について触れるのも12と24のみであり、当該時期においてはトルコ人の干渉の度合いが薄くなったようであるが、巡礼者たちがガーディアンに支払っていた約12ドゥカートの内10ドゥカートがトルコ人に支払われていたのかもしれない。だとすると、ガーディアンの手元に残ったのは、従来と同じぐらいの金額であった、ということになる。

もう一つの、そしてより重要な変化は、この時期に聖墳墓の騎士の起源がテンプル騎士修道会に求められるようになったことである（1・2・17・24）⁽¹²⁰⁾。17によると、その後に聖墳墓の騎士はマルタ（ロドス）騎士修道会の管理下に置かれ、当時においては「キリスト教共同体」*Republica Christiana*を体現するものであったが、テンプル騎士修道会に源流を求めたのは、「共同体」の戦闘意識をより高めるためであったのであろう。このことは、1550・60年代の間に儀礼に使われ始めたゴドフロワ・ド・ブイヨンの剣が、当該時期に慣例化していたことから窺い知ることができる（1・2・8・24）。

2. 「十字軍」の記憶

さて、そのようなゴドフロワ、およびその後のエルサレム国王たちの墓を、当該時期の多くの巡礼者たちも目にする事となる。しかし、そこに特別な感情を付加するような記述は見られない⁽¹²¹⁾。それに付随して、「十字軍」の記憶に関する情報の多くはゴドフロワとボードワン1世を始めとする歴代のエルサレム国王たちの業績、およびギー・ド・リュジニャン統治期にエルサレムなどがサラフッディーンによって占領されてしまったこと

⁽¹¹⁸⁾ 拙稿「後期十字軍再考（8）」79～80頁。

⁽¹¹⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考（8）」79頁。

⁽¹²⁰⁾ 唯一独特のカテゴリーを設けているのは、6である。彼は、騎士修道会組織が聖墳墓の騎士修道会、聖ヨハネ騎士修道会、テンプル騎士修道会、ドイツ騎士修道会の四つであるとする。6, fol. 280-282. なおその記述の中で、彼はドイツ騎士修道会が1525年にプロイセン公国になったことに触れるが、同じ内容のことを5は同騎士修道会がルター派の誕生によって消滅してしまったとして嘆く。5-(1), p. 294.

⁽¹²¹⁾ 1, S. 334b-336a; 2, S. 225, 229 f.; 3, p. 254 f.; 5-(1), p. 242 f.; 6, fol. 296 f.; 12-(1), p. 56 f.; 17-(1), p. 204; 21, fol. C71; 24-(1), fol. 172l f. なお17は、ロレーヌ公に関する情報をわずかに付け加える。

に集中するが、やはりそこに作者たちの感情を垣間見ることはできず⁽¹²²⁾、これらの点では 1570 年以前の記述との大きな違いは確認されない⁽¹²³⁾。

ただし、この中で目を引くのは、これまでに聖王ルイを始めとする「フランス国王たち」Roys de France がゴドフロワのように戦ってきたとしてナショナリティーを覗かせる 22、同様に、ゴドフロワが聖地を占領した後に「フランス国王や諸侯たち」Roys & Princes François が彼に続いたとする 24 の記述である⁽¹²⁴⁾。その一方で、当該時期において唯一「十字軍」Cruzada という単語を用いるスペイン人の 13 は、教皇こそが贖罪と「十字軍」において大きな権限を持つこと、および「十字軍」の歴史記述を、フリードリヒ 1 世およびフリードリヒ 2 世と続けた上で、1215 年で「終了」fin と締め括る⁽¹²⁵⁾。この記述にはイングランドのみならずフランスについての言及が見られないのであるが、それがハプスブルク家の血を引くフェリペ 2 世統治下のスペインにおける「十字軍」の歴史の特徴であったのかもしれない。そこにもナショナリティーを見るのであれば、「十字軍」の歴史記述に地域的な差異が見られなかった 1550・60 年代は例外的であったとして捉えなければならない⁽¹²⁶⁾。そしてこのことは、次に見るように、過去の歴史と聖地回復および「十字軍」の希望とを結びつけているのが、22 と 24 という 2 人のフランス人のみであることから傍証される。

3. 聖地回復と「十字軍」の希望

そもそも 22 の作品は、ゴドフロワの末裔であるロレーヌ公シャルル 3 世の妹ルネに捧げたものであり、ゴドフロワによる聖地占領に関する記述から始まる。続いて、ゴドフロワはサラセン人を駆逐したが、現在のエルサレムはトルコ人および異教徒の手中にあり、従って、ルネの兄であるシャルル 3 世がそれを回復すべきである、と記す⁽¹²⁷⁾。また、その作品の中段に位置する聖墳墓教会への参詣を記した箇所において、次のような疑問を呈ず

⁽¹²²⁾ 1, S. 297b, 322b; 2, S. 213, 279, 284; 5-(1), p. 235, 248; 13, fol. 41 f., 321; 17-(1), p. 110, 187, 191, 277, 282, 291 f., 308, 314 f., 318, 321, 324, 335; 18, fol. 128, 157; 22, fol. aiil f., 501; 24-(1), fol. 140l, 214r. その他に関する記述については、騎士修道会の活動について (2, S. 110; 17-(1), p. 275, 316), リチャード 1 世によるキプロス島占領について (5-(1), p. 329; 24-(1), fol. 222r), アレクサンドリアを一時占領したルイ 9 世やピエール 1 世について (5-(1), p. 27; 22, fol. 66l f.; 24-(1), fol. 265l), フリードリヒ 1 世の溺死について (16, p. 96), 第 4 回十字軍について (24-(1), fol. 86l) となる。

⁽¹²³⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (6)」128 頁; 拙稿「後期十字軍再考 (7)」91 頁; 拙稿「後期十字軍再考 (8)」80～81 頁。

⁽¹²⁴⁾ 22, fol. fol. 66l f.; 24-(1), fol. 140l.

⁽¹²⁵⁾ 13, fol. 41 f.

⁽¹²⁶⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (6)」129～131 頁; 拙稿「後期十字軍再考 (7)」91～92 頁; 拙稿「後期十字軍再考 (8)」80～81 頁。

⁽¹²⁷⁾ 22, fol. aiil-aiiir.

る。聖墳墓教会の鍵は、「悪魔の僕」 *serviteurs du Diable* である「不敬者」 *infidels* の手中にあるが、「(なぜ) 今やトルコ人によって (それは) 占拠されてるのか?」 *estre maintenant cōnqué par les Turcs?*, と。そして、「神が我らの国王やキリスト教徒諸侯たちに、先人たちの足跡を辿るように要求するように、神に祈る」 *prier Dieu qu'il donne la volonté à nostre Roy, & aux Princes chrestiens, d'en suivre les traces de leurs ancestres* のである。ここで言う先人たちは、先に見た、ゴドフロワやボードワン 1 世のように戦った聖王ルイを始めとする古の「フランス国王たち」のことである⁽¹²⁸⁾。このようにして、教会人であった 22 は、聖墳墓の騎士以外の要素、すなわち巡礼中の実体験から来る、もしくはそれが増幅させた反イスラーム・ムスリム感情、フランス人の「十字軍」の歴史と聖地の現状を、フランス人による聖地回復および「十字軍」の希望の中に収斂させていくのである。

俗人の 24 は、教会人である 22 とはまた別の形で聖地回復および「十字軍」の希望を提示している。全 31 条からなる上述の「写し」では、シャルルマーニュ、ルイ 6 世およびフィリップ (2 世?) といったフランス国王、およびゴドフロワの記述を中心とする第 2 条に続いて、第 3 条では次のように書かれてる。「また次のように記す。上に名の挙げられた我々は、先んじてなした我々の誓いを成就してきた。我々の誠実さによって、および神のご加護に鼓舞されて、我々はサラセン人の領域であったエルサレム王国を獲得し、彼らに対して称賛に値する勝利を達成し、件のキリスト教信仰を増大させた。加えて、最良のキリスト教諸侯という名称が、正当にも我々に宛がわれ、他の諸侯およびキリスト教徒の民たちから価値が与えられた。幸運にもフランス王国および我々に属する所領、あるいは財および人力によって我々を援助した非常に敬愛なるキリスト教諸侯の (管轄する) 全ての他の王国へと戻ってきた時、ついに我々は自身の誓い、および以前から着手していたことを、達成することができたのである。加えて、同じ理由により、我々自身が有するような榮譽の一部を、彼らが有することはしかるべきことである」 *Sit etiam notum quod nos supranominati circa praemissa vota nostra adimpleuimus. Nostrisque diligentis, & cura Deo inspirante regnum Hierosolimitanum, partisque sarracenorum adepti fuimus, et contra illos victorias laudabiles obtinuimus, dictamque fidem Christianam auximus. Propterea nomen Christianissimi iusto nobis impositum fuerit, et merito ab aliis Principibus, & populo Christiano datum. Cum feliciter in regnum nostrum Fraciae terrasque & dominia ad nos spectantia reversi fuimus, Etiam omnia alia regna Principibus Christianis nobis amicissimis in nobis subveniundo, tam suis diutius quam hominibus, et tandem possemus adimplere vota nostra, et que iamdudum inceperamus. Propterea ut ipsa ratio*

⁽¹²⁸⁾ 22, fol. 66l-69l.

decet hanuerant partem honoris prout nos ipsi habuimus と⁽¹²⁹⁾。この「写し」は、羅仏対訳という体裁をとっているが、恐らく原本はラテン語のほうであり、フランス語訳は 24 によるものであったと考えられる⁽¹³⁰⁾。この「写し」自体、少なくとも当該時期における他の巡礼記には見られないことから、24 による創作の可能性も否定できないが、24 の言葉を信じるのであれば、聖墳墓教会には他の言語使用者を対象とした別バージョンのものが存在していたのかもしれない。いずれにせよ、少なくとも 24 の中では、聖墳墓の騎士を軸として、巡礼中の実体験から来る、もしくはそれが増幅させた反イスラーム・ムスリム感情、フランス人の「十字軍」の歴史と聖地の現状、フランス人による聖地回復および「十字軍」の希望が有機的に結びついているのである⁽¹³¹⁾。

おわりに

巡礼の中での経験と反イスラーム・反ムスリム感情とを結びつけたのは、フランス・イタリア・スペインといったカトリック圏内出身の巡礼者たちに特徴的であった。しかし、さらにそこから「十字軍」の希望にまで至るのは、22 と 24 という 2 人のフランス人の中においてのみであるが、このことはフランス地域における「十字軍」の希望が伝統的な物として定着しており⁽¹³²⁾、それが経験との相互作用によって増強されていたことを示す。

しかし、幾つかの点における聖地巡礼システムの変化が見られた当該時期にとっての全体的な特徴ということになると、感情面における諦めや恐怖の支配を挙げねばならない。そしてこのことは、ドイツ地域出身の巡礼記作者たちの特徴であったとも言えよう。とい

⁽¹²⁹⁾ 24- (1), 328l f.

⁽¹³⁰⁾ 若干の違いはあるものの、基本的な内容はラテン語版もフランス語版も大差ない。なお、フランス語文は以下の通り。《Soit encore manifeste que nous Empereurs, Rois, & Princes, Auons saict grand debvoir d'accomplir nosdits vœuz, & que par nos grandes valeurs, prouesses, hardiesses, & bônes conduits, que Dieu a faites de nos grandes armées. Nous auons acquis ledit Royaume de Ierusalem ez pays des Sarrazins, & eu de grandes & honorable victoires contre iceux. Et par telle voye & moyen, augmenté la foy Chrestienne, à cause de quoy nous auôs iustement acquis le saint nom de Tres-Chrestiens Roys, & merité les grandes louangesque nous auons receus de tous autres Princes & Chrestiens, Quand nos sommes heureusement retournez au Royaume de Frances, & grandes Seigneuries à nous appartenans, & aux autres, Royaumes, & pays des Princes Chrestiens, nos amis, Lesquels nous ont aidez & secourus de gès & argent, pour accôplir nos veus d'entreprises cōtre lesdits infidelles, & ont eu leur part de l'honneur des victoires & louanges.》

⁽¹³¹⁾ 他に関連する「写し」の条項については、第 4 条（聖墳墓の騎士修道会は、対異教徒およびカトリック教会の防衛のために存在すること）、第 20 条（捕虜救済のために資金を出すこと）、第 25 条（異教徒と戦うこと）、第 26 条（スルタンへの外交使節は、捕虜を解放するために金銭を抛出するよう努めること）、第 27・28 条（外交使節は、異教徒の世界の情報を提供すべきこと）、第 29 条（五つの十字を服に縫い付けた上で、対異教徒のために集結すべきこと）、第 30 条（キリスト教徒と戦う者は破門されること）となる。

⁽¹³²⁾ 拙稿「後期十字軍再考（6）」130～131 頁；拙稿「後期十字軍再考（7）」95～96 頁；拙稿「後期十字軍再考（8）」82～83 頁。

うのも、1・2・20の3名は、その聖地巡礼記を無事に帰還することができたことを神に感謝する言葉で締め括っているからである⁽¹³³⁾。中でも2は、『詩篇』第107篇23～31節を引用して、次のように作品を閉じる。「彼らは、海に船を出し、大海を渡って商う者となった。彼らは深い淵で主の御業を、驚くべき御業を見た。主は仰せによって嵐を起し波を高くされたので、彼らは天に上り、深淵に下り、苦難に魂は溶け、酔った人のようによろめき、揺らぎ、どのような知恵も呑み込まれてしまった。苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、主は彼らを苦しみから導き出された。主は嵐に働きかけて沈黙させられたので、波はおさまった。彼らは波が静まったので喜び祝い、望みの港に導かれて行った。主に感謝せよ。主は慈しみ深く、人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる」と⁽¹³⁴⁾。我々は、ここにかねてから確認してきたドイツ地域の出身者とフランス地域出身者との温度差を見出すことができるのであろうが⁽¹³⁵⁾、確定的なことを提示するのは、少なくとも16世紀残り10年間の分析を行う予定である次稿に譲りたい。

（本稿は、2016年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。）

⁽¹³³⁾ 1, S. 349a; 2, S. 298; 20, fol. 69l-70r.

⁽¹³⁴⁾ 訳は日本聖書協会『聖書 新共同訳』2004年、に従った。

⁽¹³⁵⁾ 拙稿「後期十字軍再考（6）」132～133頁；拙稿「後期十字軍再考（7）」96～97頁；拙稿「後期十字軍再考（8）」83頁。